

冬 雷

短歌雑誌

TOURAI



二〇二四年六月一日発行（毎月一回一日発行）
第六十三卷第六号（通巻七四八号）

6月号・2024年

お知らせ

■村上美江氏歌集『さみどり』の批評特集号を

9月号に予定しております。

* 著者を激励するためにも奮ってお願いします。

* 取り上げる作品には、掲載ページを記入の事。

* 大山宛にお願いしますが、電子メール以外の場合は必ず原稿用紙を使って下さい。

* 締切は、六月末日と致します。

■冬雷二〇二三 作品年鑑・合同歌集 ですが、

お陰様で参加首一〇三名となり順調に進捗しております。予定通り7月中には刊行できると思っております。無事継続刊行の基準を越えて来年へ繋がることになりましたが、編集部では本年を最後の制作と定め、集大成とすべく取り組んでおります。現在本文約五〇〇ページの見込みです。たっぷり作品展望のスペースも設けます。お楽しみに。

《冬雷短歌会》

6月号 目次

| | |
|------------------------|----------------|
| 冬雷集 | 1 |
| 作品一 | 18 |
| 六月集 | 34 |
| 残響集 | 40 |
| 作品二 | 46 |
| 作品三 | 56 |
| 四月号冬雷集評 | 山本三男 14 |
| 『四斗樽』刊行以前の太田行蔵(4) | 大山敏夫 15 |
| 四月号作品一評 | 小林芳枝・藤田夏見 32 |
| 四月集 / 残響集評 | ブレイクあずさ 40 |
| 島木赤彦の一首鑑賞 4 | 乾 義江 41 |
| 四月号作品二評 | 井上莖子・江波戸愛子 42 |
| 四月号作品三評 | 桜井美保子・橘 美千代 44 |
| 四月号十首選 (冬雷集・四月集 / 残響集) | 46 |
| 四月号十首選 (作品一・作品二・作品三) | 48 |
| 歌集・歌書紹介 | 佐藤靖子 51 |
| 歌集『青の本懐』 喜多昭夫著 | 大山敏夫 60 |

冬雷集

大山敏夫 埼玉

花をへてほどもあらぬにふくらめるその実ほのぼの梅の木はある
何をして居るのか鴨ら輪を描き連なり泳ぎをりをり潜る

いつもああして輪泳ぎすると鴨らを言ひ樂しげずつと見て居るをばさん
さくら咲き辛夷の白い花の立ち寒きながらも四月の初め

一週まへ満開の桜ほぼ散りて里山に染井吉野の盛り

ゆるびたる光のなかを「てふてふ」の韻をともなふ紋白の飛ぶ
のこり花五つ六つつけのばす枝四月半ばになればさくらは

たけのこが今年巨大化する話思ひ歩む竹林脇の薄闇

老の中ほど

赤羽佳年 東京

若き日の非礼詫びつつ老を生く老の中ほど詫び言ばかり

もの知らぬ若き日の非礼許されよ反省しきり身を熱くする
生涯にひとつくらいは残せるかこれまでの歌これからの歌

秋の陽に朱色の楓の隣にて公孫樹の黄葉はらはらと舞ふ
生涯に診察を受くる待ち時間幾時間ならむいつまで続く

新聞を読まなくなりて幾年か世に遅れつつ老を進める

ことさらに老を詠ふにあらねどもおのづから出づる老の嘆きは

外出の稀になりたるこの頃はけぢめも非ず疎かな日日
うつうつとけふを籠りて歌を詠めば夜の雷ガラス戸鳴らす

赤間洋子 東京

ペランダのはるか向かうに見える森は日立中央研究所なり
コロナ禍故に中止が続いた観桜会再開を知り足を運びぬ
桜の木種々の品種が植ゑられて太き樹があり若き木もある
初代社長の意志にて多くの樹は切らず武蔵野の森が手付かず残る
庭園の中央には池があり水湧き出でて白鳥遊ぶ

太き杉谷底より生えて天を突き十階建のマンションより高し
通行止めの道の先には竹林あり筍生えてゐるかも知れぬ
遊歩道枝分かれして行く道に葶の花が咲き続きをり
スマホやカメラで写真撮る人多けれど我は時々深呼吸する

兼目 久 栃木

十時間眠ることが大切と大谷選手が言へるを信ず
妻と共にことは三回作りしが去年は九回作りし「しもつかれ」
スポーツ選手は全力を出し終了まで勇気をもらひ試合を見たり
石塔のつなぎめよりわづかなる隙間より芽を出すすみれの花
茎の色茶色にして花の色紫色を呈すホトケノザは
三月の畑を歩けばぬかるみてころばぬやうに足元を見つむ
児童数16人となり廃校になる母校小学校いとほしむ

山麓を散歩しつつもらひたるミツマタことしも花を咲かせり
長期的に見れば暖冬短期的に見れば寒冬ことしの冬は

山崎英子 東京

桜満開をテレビは告げて賑々し娘と共に花見に行かむ
大学の入学式と九段会館へ人は溢れて花はなの下
思ひ出す信州の花見は四月二十九日天長節の頃でした
東京より転任の先生毎日アルプス眺められ君達幸せと
からたちの垣巡らせる校庭に夏休み終れば先づ草取りに
運動会に又バスケットの練習に懸命に励みし只なつかしく
常念岳や槍ヶ岳朝夕眺めをりし教室の窓に
アルプスおろしの風は冷たく毛糸の襟巻き深々として
人生楽しい思ひ出だけ憶えてみればよいとの言葉通りに

森藤ふみ 東京

春咲きの菜の花の種播き終へて水撒きするとポランティアの人
前に行く人のさす傘われの持つ同じ色柄なるに気がつく
臥竜梅の支柱に括られたる幹のそこより曲がり真つすぐ伸びる
近場での花見にしよう友三人と大横川の遊歩道をゆく
花見船待つ人あまたの発着所過ぎれば静かな花の道なり
大横川逸れたる道をなほ歩き隅田川の堤防に立つ
ユリカモメの白き眩しみ堤防に春の日を浴び深呼吸をす

風にのる桜花びら散りかかる未だ芽吹かぬハンカチの木に

昨年思ふ

櫻井一江 東京

吉野山「一目千本」満開のニュースの写真に昨年思ふ

コロナ禍の収まる気配なきままに制約大增しきツアーの募集
憧れの吉野山行くハイキングツアーコースをすんなり決めき

参加条件こまごま「重要」文字並びその中行く旅「吉」と思ひき
コロナ感染予防対策確認のワクチン接種済証と身分証明書

「足腰の動ける今を存分に」亡夫の声を夢に聞かずに

バス乗降たびに消毒カメラなど他に頼むを禁じマスク着用は常時
吾よりも少し年上の老夫婦歩みはきちんと急がず休まず

満開の桜みち歩み吉水神社の境内にて眺めし「一目千本」の景

有泉泰子 山梨

自らの痛み嘆かず妹は入院の夫に笑顔で優し

妹の駅まで歩き送りくるる痛む腰言はず笑顔で手を振り

退職の近づき夫はたまりたる荷少しづつ持ち帰り来る

義父使ふ机本棚そのままの診察室に夫の荷の増す

夫八十七歳今日は勤めの最後の日いつもとかはらず「行つてきます」と
貰ひたる大きな花束胸に抱き帰りきし夫仕事を終へる

有難う、ご苦労さまと四人の子それぞれの思ひのメール届きぬ

富田真紀恵 富山

いつまでも少女のわたしで居たかつた老いふかみたるわが手見つめる

皆さんの優しい心でなごやかな日々が過ぎせる施設の私

心根も少しは丸くなりたるか年重ねきて春をむかふる

読むと詠む二つの文字にあやつられ齢ひ積みきし吾かと思ふ

屋根雪の白かがやきて久々に空の青のひろさに気づく

黒田江美子 千葉

再びのコミュニティバス導入の実証実験試行されると

二年前却下されたる我が地区の導入目指し役員奮闘す

新たなる停留所案を提案し当事者意識高めて応ふ

雨上がりの路上行く人を三階にエアロバイクを漕ぎつつ眺む

窓際にエアロバイクのレベル上げ路上駆け行く若人を追ふ

リハビリのエアロバイクに立ち上がり漕げば密かにアスリート気分

在宅の緩和ケアを十四日姉は静かに逝きてしまへり

満開の桜の花枝式場を埋めて葬送甥の提案に

我が巡り寒けく風の通りゆく姉を連れゆくかのやうにゆく

青木初子 神奈川

去年の夏高温続きて幹弱る牡丹の冬越し花の芽を持つ

少しづつ牡丹の蕾色を見す寒の戻りの著き三月

幹に付くまだ柔らかき牡丹のカイガラムシを指にて弾く

枯れ枝と重なる枝を間引きつつ蠟梅の実の七を数ふ

蠟梅の枝に初めて実を見たりまだまだ小さし小指の先程
庭の木を剪りて日当たり変はりたる庭に探しぬ肥後董の芽
朝と晩冬服を着て真昼間は夏日に調子狂ふ体は

中村晴美 茨城

裸木に小さき芽をもつアヲダモの寒さの緩み枝先の萌ゆ
家周り草の生えみて春となる早目に抜きぬ手遅れ前に
草抜きてまた生えるを繰り返す地味な作業が美観を保つ
増えすぎた球根捨てるも大事なりムスカリ脅威の繁殖力
いつの間に消えし植物もある庭に合ふ合はないの相性を知る
庭のある暮らしは心豊かなり草抜きに追はれ辛きもあるも
草覆ふ幹線道路の土地の増え売地の看板までも立てらる
囑託の五年勤務を無事終へて夫は初の失業者となる
スマホにて求人検索日課とす夫はソファーに寝転びながら

山口 嵩 福島

降りきたる雪は道路を濡らすのみ梅咲く枝に僅かに残れり
春先の森の風情はめまぐるし風や蕾も日にけにさざめく
雪肌之花をのぞかせクロッカス黄色かがよふ午後の日ざしに
寒さにも春の兆しが漂ひて日ごと褪せゆく白き山肌
街灯の明かりに濃淡つけて降る雪の積りを気にし眠りへ
残雪が斑に残る庭なかを雀びよんびよん露の臺いづ

薄日受けまばらに降りくる雪の間を線香の煙ゆたゆたのぼりぬ
低山もアルプスなみの急登に四五分なれど西穂高岳ほこの気分

吉田綾子☆ 茨城

余りにも寒暖の差の激しさに白木蓮の開花止まりぬ
薄れゆく朝靄に浮く屋敷樹々の芽吹きの色合いそれぞれ異なる
軒下に越冬したるサボテンの勢いもどり来彼岸も明けて
催花雨に潤う桃の花ざかり湾曲したる樹形の親し
葉桜の河津桜に沿う如く枝垂桜の花は靡きぬ
柔らかき箒いっばいの菜の花に穂の芽添えて友の持ち呉る
お花見は来年にすると言う我に多忙なる息子笑みつつ頷く
大学の入学式に両親と連れ立つ孫の凛々しき姿

橋本文子 鳥取

風強くフェンスネットを吹き上げる春の嵐は意地悪をする
春休み自動車学校職員の子らか元気ボール投げする
道沿ひに自動車学校職員の通る近くに野菜作りす
我に今日桜見せたく計画し娘は進む山沿ひ川沿ひ
幼かりし孫たちの日々思ひつつゆつくり歩く花の下道

酒向陸江☆ 東京

二分咲きの桜並木を母校まで校門前には懐かしい友たち

「校章が入れば顔はボケて良い」在校生にシャッター頼む
六十年ぶりなる友に「誰だっけ？」可愛かりしが気品あふれて
一様に良き年重ねて来たるらむ白髪つるつるいずれも愛し
栃木から九州奈良から長野から八十歳はまだまだ若い
友たちの元氣と勇氣に刺激うけ札幌までの一人旅決む
吾の背丈とうに越えてる孫娘中学入学百六十センチ
睦まじく暮せる長男家族たち雪どけ庭にクロッカスの黄

天野克彦 大阪

わが庭に一気に咲ける雪やなぎ黄いろの蝶がつかず離れず
錆いろの芝生いつしかみどり増しそここ咲ける蒲公英の花
家の辺は雀の多に棲みをりて砂場に降りて砂浴びもする
西行の花に逢はんとひとり来つ河内弘川寺山ぐせんじざくら花
西行の墳墓と伝ふ盛り土に微塵とふり次ぐ西行の花

語るとは人惚ぶことさくら木の下に在りにし君との会話
さくら咲く天上の雲道のごと逝きにし君はいづこにあそぶ
さくら花咲ける丘べに住みをれば羨しくもあらずみ吉野の山

高松 美智子☆ 栃木

植え替えはソメイヨシノの咲く頃と三月みつきを楽しみたるシンビジウムの鉢
いつ咲くか曇りの空に膨らめる桜の蕾が風にざわめく
雪柳の溢れる白を足元にソメイヨシノは咲き初めて二分

入学の黄色い帽子を待ちいるか今年の桜はしんぼう強し
寄せ植えて三年経ちたる葉牡丹が丈を伸ばして黄の花咲かす
球根とこぼれ種にて季節継ぐユリの芽伸びてノースポール盛る
さぼりたる筋肉補い頑張りたる大腿外側を念入りほぐす

高橋 説子 栃木

植木屋は梅 柿 柚の三本を伐る日を伝ふ迷ひる吾に
木は伐られ掘り起こされたる畑にはや浄めの米を啄む鳥が
参列し合唱すると兎は言ひて覚えたての「君が代」を真顔に披露す
慎重に去年より更にと心して学童三人後部座席へ

モニターもナビもカメラも無き車にわが腕信じまだまだ乗らむ
友が二年寝かせたる味噌は具沢山の豚汁となる少し濃い目の
仕舞ひたる炬燵布団をまた掛ける天板を孫に持ち上げさせて
刺し終へて糸の始末を小鋏でするとき胸にさざ波の立つ
新しく何かできるやうになることが一つはあらむ先づは試さう

大塚 亮子 東京

桜祭りの提灯付けを手伝ふと公園広場に仲間と集ふ
馴染みたる人には会はず新しき人の増え来て知る顔探す
世代交代したらし若者目立ちをり良しと思へど少し寂しき
提灯の傷み具合を確かめて電球セットすおしやべりしつ
待ちゐたる提灯点され公園の桜のつぼみ膨らむを待つ

住み慣れたる街と思へど戸惑ひぬ十階より見下ろす街の様子に
あの路地はあの橋はどこ頭の中に確かめてみる見下ろす街に
半年余り十階に暮らすこととなりひと月経てど未だ戸惑ふ

寝る力

嶋田正之 埼玉

如月の小雨そぼ降る川越のうなぎ屋へゆくスマホ頼りに
うなぎ屋の整理券持ち一時間歩む蔵町なぜか落ち着く
埼玉の一番人気のピザ屋とぞ石窯に焼くなるほどの味
辺鄙なる場所のバラックうどん屋に車押し寄せ妙な賑はひ
暑き陽に面喰ひたる日のあれど三月初旬に雪降る夜半
細き針数葉に数多付け何護るダンドボロギク黄花いとほし
桜こそ遠くに観るを良しとせむ下に集へば観ずに飲み喰ふ
毎日の散歩為せども寝る力衰へたるや欠伸を殺す
取り立てて悩むことなき己が身に眠り遮る事情はあらず

江波戸愛 子☆ 埼玉

満開の桜並木をひさしぶりあなたと歩くゆるゆるあるく
ゆつくりと並木をあゆむ忙しげに桜花を移る鳥を見ながら
ゴールデンレトリバーの歩み来る桜はなひら背中にのせて
花見より帰り来りて桜エビたっぷり入れたかき揚げつくる
送られてきたる荷物の中にあり温泉旅行の土産がひとつ
届きたる土産は茸の甘煮なり粉末状の辛子とともに

粉末の辛子を溶きて甘味の茸と和える夕餉の一品

信州の土産と知りて想いおりあにの実家のおむすびの味

橘 美千代 新潟

二十五年わが家のシンボルツリーたる花水木つひに枯れてしまへり
枯れ枯れてわづか残れる枝さきに花芽つけをり明日は伐られむ
窓の下に枝を広げて咲き満ちし花水木もはや見ることもなし
このところの陽気につられ開花せる桜おどろかす凍てつく風雨
咲きそむる桜並木の彼方には飯豊連峰しろき峰々(加治川堤桜)
カーテンより朧ににじむ半月のひかり入る部屋にトカゲも眠る
トカゲ連れ戻りし娘転職の決まりてともに家を出でゆく
転職せる娘は家を出てわれはふたたび猫とバディの暮らし

ミシエルの庭

ブレイクあずさ☆ カナダ

友の家の窓窓かたく閉ざされぬアメリカカコガラの声澄む朝も
もう会えぬことを告げいる便りあり復活祭の夜の鐘の音
入院の知らせ届けど住所なく面会謝絶の文字のみ目立つ
幹太き桜に蕾の現れてあるじ不在の庭にも春来る
早咲きの桜の写真の送信をためらいており病の友へ
クラーケンのようなる薔薇を剪定し待つばかりなり友の帰還を
シヤムロック友の窓辺に生きており聖パトリキウスよ友守りたまえ
安楽死の許可をひたすら待つという友への言葉はまだ見つからぬ

去年の春ともに酔いたる花の庭今は静かな風のみが行く

町田 勝 男 埼玉

あれこれと確定申告に不満あり金とらるるになぜ苦勞する
風止めば静かな寂寥月かたぶき明けの寒さよ胸をふるはず
林失せ荒れ野の道をチロチロとツグミはわれの道案内す
ヒロシマもナガサキもつひに訪はざりきオッペンハイマーなる人知らず
なべて世は付度と従来に占拠されおのづからなる愚行はまれに
春雨に小綬鶏七羽かれくさをくぐり急げり家族なるらむ
クロツカスの黄の色失せて小さき庭に射干と檀子の競演なり
春彼岸まだ明けやらぬ野の道をあげぼの一人無心なりけり
五つ星の数独解けて四つ星がなほ解けざりき頭混乱

稲田 正 康 東京

突然の秋の氣象に枯れかかる木槿になほもつぼみが開く
植ゑてあるものにあらねど柵に沿ひ紅く小さき花の立ちたり
夕焼くる空に梢の影ならび時のチャイムが広場をわたる
あかりつく靴はくをさなその灯り暮るるすべり台に幾度も動く
錠剤七個一気呑みせし母おもひ同じ七つを手のひらに置く
父教へくれしわが家の麻雀に嶺上牌ありき「嶺上開放」ありき
妹婿「ドラ麻雀」を持ち込みてわが家のゲームに現代来たる
対ひたつ枝にみどりの広がりてわが富士のなし秋いたるまで

姉 川 素枝子 福岡

枝垂梅といふもの散りて水仙の咲くひとところに眼およびつ
河津桜と人いふものを見に來たり二本の木の花咲き満てるとき
残されて高架の下となるさくらためらひつつ散る風なきときに
手を取りてもらひし梅をこの年は車より見る咲きそむ花を
梅園に心のこして帰りゆく香りきげざるほどのあはれさ
天に向き枝をひろぐる大櫛日まち雨まち芽吹くとき待つ
あからひく光りの中の大櫛あかくしけむる芽吹くといひて
歌つくりうたを思ひて過ぎゆかばひと世の幸と思ひて眠る
土を踏むしあはせなくて見る画面つかれは直ぐに眼に耳に來る

井 上 菅 子 山形

ふつくらと馬酔木の蕾膨らめば春に膨らむものを羨しむ
はうぼうの眼としばし見詰め合ひ買はず離るる進化して来よ
そくそくと切られて床に散らばれる身の一部なるもの行く末
鉢を転がし脚立倒して春の風なほ治まらずガラス戸叩く
善かれと思ひ薦めたること裏目にて落ち込む春の午後の糠雨
じゆうじゆうと脂の匂ひ村上の鮭の定食懐かしき春
これの世の哀しみよそに道端に転がる石が春日に温む
下駄箱の上に冬越すエケベリア寒い寒いと下葉を枯らす
山間の峠の茶屋に紅梅が白梅が咲く古き絵のごと

陽だまりに何を啄む群すずめ撒きたる
古米すでに失せるに 山口 嵩

作者は群すずめのために古米を撒いた
のでしよう。その古米はもう食べ尽くし
てしまったのに、まだ何かを啄んでいる
様子を見守っています。野に生きる群
すずめを慈しむ思いが感じられます。

湯たんぼの温みの優し床の中両手を胸
にひと日を巡る 吉田綾子☆

子守唄のような穏やかな気分の歌で
す。床の中で湯たんぼの温もりを感じな
がらその日の事などに思い巡らせ、やが
て安らかな眠りに入っていくのでしよ

久しぶり髪切りに行き店長に心配して
たと声かけられる 橋本文子

何気ない日常の一コマが歌われていま
す。作者はこの店の常連で店長とは気心
が知れているのでしよ。店長が久しぶ
りとなったのを心配したのは、営業上の
言葉だけではないようです。

宝登山に蠟梅咲く頃訪れき友も吾も十
年若く 酒向陸江☆

何かの香りでふと過去の事が浮かんで
来ることがありますが、この歌もそんな
一首です。十年過ぎてでも思い出すのは、
楽しい時を過ごしたからでしょう。

夜のふけの机に座りたばこ吸ふ書棚の
ガラスに赤き火映る 天野克彦

書棚に映るたばこの火が印象的で見事
な作品です。この赤い色は作者の生命を
象徴しているかのようです。昨今の健康
志向でたばこを吸う人は少なくなってい
ますが、精神的には有用なのでしょう。

この作者の作品が秀作揃いである理由も
わかる気がします。

大きな事故起こさぬ内に引く決意為すべ
き時と傾きゆきぬ 嶋田正之

運転免許の自主返納について、徐々に
作者の思いが定まっていく様子が詠まれ
ています。思いが決まるまでに様々な葛
藤があったことを思わせる作品です。

たんぼの綿毛のままに年越しの風待
ちてをり朝の日の中 古嶋せい子

発想の豊かさに驚きました。たんぼほ
といえは花に注目しがちですが花の終わ
った後の綿毛は種を飛ばすためにあるの
です。風がなければいつまでも綿毛の
ままですが、野にあればいつか風が吹く
でしょう。結句が見事にこの光景を浮き
立てています。

自らの家に帰ってほのぼのと真昼のや
さしき日のなかにある 姉川素枝子

初句で自らという言葉を用いたのは自
宅への特別な思いがあるからでしょう。
「ほのぼのと」という言葉がよく効いて

いて下の句の雰囲気を出しています。な
かなかこういう風に自然には歌えないも
ので、作者の熟練を感じます。

タッチパネルに注文をしてロボットが運
ぶレストラン次には行かぬ 井上菅子

最近このようなレストランが増えまし
たね。初句から四句目までがレストラン
の説明になっていますが、短歌には違和
感のあるカタカナ言葉が続きます。一転
した結句では作者の思いがはつきりと述
べられていて、よくわかる作品です。

過去回想の助動詞「し」の誤用・慣用について

『四斗樽』刊行以前の太田行蔵(4)

— 『慕何雑詠』を読む —

大山 敏夫

⑳ガムかみてやまぬ若者かたはらに来しにこだはりて幾
駅か過ぐ

㉑糞っ屑かぶせておくとよく母がなぐさめくれしくやし
がるるとき

最近ではガムを噛む人が少なくなった気がするので、こ
ういう場面に遭遇することもなくなつた㉒だが、ぐちゃぐちゃ
噛みながらヘラヘラと歩く軽薄感を覚える若者であったのだ
ろう。この場合の「し」は、過去ではない現在なので「×」。
「立つにこだはり」くらいにしておいて欲しい所である。一
方㉓は母のアドバイスなので昔のこと、「○」となる。ただし、
ここは連体形ではなく「き」と切った方が自然かと思う。

臨終にはむだことなればわが名など呼ぶべからずと固
く固く言ひおかむ

自らの死のこともしばしば頭をよぎるのであるが、こ
ういうことも周囲に宣言するのは一種の頑固さだ。

国富みて民安らぐといふこれか正月四日の銀座の人出
いつの間にか、こう歌うほどに国情は安定し国民の生活レ
ベルも上がって来ているようである。明治神宮でもなく浅草
でもない、銀座だというのがこの一首の見ている所。背景は
いったいいつ頃のことなのか。

安保批准わが知り得たること一つ 天皇はまことあは
れにおはす

という歌も近くにあることから、岸信介が日米安保条約を批
准し総辞職したのが一九六〇年(昭和35年)なので、このあ
たりということになる。

㉒農民をかつて言ひしが工員を国の宝と言はむか今は
とも歌っている。

大艦をつくる思へばビルなどは屁の河童ならむ変貌す
る日本

という工業大国、メイドインジャパンの風が吹き荒れ始めた
時代である。㉓は、江戸時代あたりでは「士農工商」という
言葉があり、農民の地位が高かったが、今は「工員」がその
地位に変わっているという認識である。歌われるように「か
つて」言われていた話なので「○」。

㉔軍閥をあやまらしめしもの根はずでに日本にあらず
といふか

この国を戦争へ狩り立て敗戦に導いた軍閥の過ちは、もう軍隊も無いのだからその根も絶えたのだという声に疑問を投げている。齋藤茂吉も敗戦後の嘆きの中で、

軍閥といふことさへも知らざりしわれを思へば涙しな
がる

と歌って落ち込んでいた。軍閥の犯した過ちも、軍閥そのものを知らなかったという茂吉のなげきも、共に過去回想のことなので「○」である。同じように、政治判断の裏側の汚い部分を批判する歌がある。

③② 日本綿製品輸入を妨げし米国政治家の収賄の記事

後になって不正の露見を記事に読んだもので、時間的経過がかなりあり「○」となる。

③③ ぢぢよ来よ四国来て見よ夜も昼も涼しと孫が言ひ来し
ハガキ

四国在住の孫からのハガキ。こうも歌う。

仮名ばかりのたどたど書きの孫の手紙書かする母を思
はざらむや

かつては子供から来たものをへくの子がよこす手紙のかなちがひ拾ひつつ思ふそのあけくれを」と詠んだ。月日の流れは早い。さて③③の歌だが、このハガキは今現在手にするもので口語の「た」に置き換えられる。「×」である。

③④ 瀬戸の海心うつろに渡りけり渡りしままになれる子ゆ
ゑに

僧たちの写経まねびてむらぎもの心しづめと万葉写す

「むらぎもの」は「心」に掛かる枕詞。あたかも僧らが写経を勤めるように、心鎮めんと万葉集を写すことだ、の姿勢。万葉を尊ぶ気持が出ている。

この赤羽稲付は小誌選者桜井美保子氏が生まれた地で、丘は幼少時によく遊んだところだという。今年の三月号に、

太田先生歌ひたまひし赤羽の稲付はわが生まれしとこ
ろ
桜井美保子

道灌山と呼びて親しみし丘の上の静勝寺一帯は稲付城
跡
同

と歌っている。桜井氏もなかなかのもので、太田行蔵に因む歌なので、意識的に過去回想の助動詞連体形「し」を幾つも使っているのである。稲付城は築城に名を馳せた太田道灌の築いたもので城跡は道灌山と呼ばれていた。

万葉集巻第六今日あがるうれしくて朝早く起きたり

白雲の向伏すなどと思ひつつ見やる広野は春ならむと
す

万葉のことで頭がいっぱいだったのか、太田行蔵はこう歌う。だが、「白雲の向伏す」と歌ったのは長塚節だし、旧制第一高等学校寮歌にも「白雲の向伏す高嶺七谷を水は落つれど慄れゆく頂いづこ」があるが、万葉集には「青雲の向伏す」とうたわれ白雲の方は「棚びく」となっているのが巻十三に

渡って行ったまま帰らない子を思い、瀬戸の海を渡る作者である。詳細はわからぬものの、何か重大な出来事を回想し虚無感の中にいるのは分かる。「○」であろう。

③⑤ その昔ひじり仰せし道はしも静かならでは行じがたし
と

これもいにしへの聖人の言葉なので「○」となる。

都北赤羽稲付丘のははたち万葉集をよむ集ひに「こもよ」と名づく。伝不習とか、われ、伝はりて習はざりしに、習はざるを伝ふの任にあたる。

という詞書があり、十六首ほどの関連作品が並んでいる。「伝不習」とは、論語で言う「伝不習乎」(学んだけれども十分習っていないこと、生かじりになっていることを教えなかったか)のことかと思うが、自分もこう言われる危険性のある身だけれども、取えて教える任についた、との意味だろうか。

「こもよ」の名は万葉集の一首目の雄略天皇の作と伝わる「籠毛こも與美籠母乳こもち」から来ている。

大君が草摘む娘を美しみまづ仰せたる御言ぞ籠毛こも与よ
③⑥ めぐき娘が春日の丘に草摘むとかたへにおきし籠もよ
その美籠

このように歌い始める。③⑥の結句は「こもよそのみこと」と読むであろう。祭祀に用いる春草を乙女らが摘む時の美しい籠の意味だとされている。この「し」は当然の「○」。

ある、

白雲之しらうもの棚曳たなび之の青雲之あそくもの向伏むかぶす国乃の天雲あまの下有あとの人者ひと妾耳めみ鴨か
君きみ余に恋こ濫わ……

である。「むかぶす」とは、「遙かあなたに横たわっている」という意味のようである。「白雲」は文字通り白い雲だが、「青雲」は、一説には青空を雲に見立てて言う語と『広辞苑』にある。ならば「青雲の」に「むかぶす」のつく方がしっくりする気がする。

③⑦ 塩津山うち越えとわが読みしときはなみづゆれて垂れ
さがりたり

この歌は、笠朝臣金村作だが、
塩津山打越去者我乗者馬曾爪突家戀良霜

(塩津山うち越え行けばわが乗れる馬そ爪づく家恋ふ
らしも)

を読み上げた時にはからずも「はなみづ」が垂れ下がったとたという、ちよつと情けない状況を捉えている。この塩津山を紫式部も歌っていた。

知りぬらむゆききならず塩津山よにふる道はからき
ものぞと
紫式部

敦賀から琵琶湖へ行くに越える峠道で険しいことから塩辛い思いをしたと言う。そういう名のついた所なのか。③⑦は作者の経験なので「○」だと思ふ。万葉集は原文(万葉仮名表記)で読むと楽しいので、併記することにした。 《統》

作品一

桜井 美保子 神奈川

一日中掛けゐる眼鏡違和感のなくてそのまま眠りてしまふ
文庫本なるべく活字の大きいもの一冊入れおく肩掛けバッグに
しつかりと読まねばならぬ原稿は眼鏡の上にルーペ重ねて
ルーペ最早なくてはならぬものとなり眼鏡に重ねる歳となるとは
新しきプリンターのインクはタンク式とまどひ補充す動画の通りに
真夏には暑くて着られぬナイロンのレースの半袖四月に着ておく
乗換への駅構内にブラウスを買ひし店二つ消えてしまひぬ
キウイ入りの寒天冷やして食べる午後日記を見ればひと月早し

田端 五百子 岩手

雪残る稜線かすめて雲流るされどしぼる名のみの春よ
津波来たるラインに植樹せしサクラ小枝ながらに春風にゆるる
宇宙飛行士と帰還はたせし桜種接ぎ木によりて四粒発芽す
立ち昇る湯気に眼鏡を曇らせて立ち喰ひそば啜る金髪ひとの女
ピアノ教室いまも窓にはメトロノーム先生は生徒と津波に吞まれき
能登募金募る少女に手袋を脱ぎて小さな気持ちを託す

冬枯れの小藪の中に黄の破片触るればかすかに命身じるぐ

野村 灑子 千葉

いづこかにまぎれて失せしもの一つブローチ・ネックレス・髪かざりの青
朝の靴には余裕のありて出で来しに夕に外反拇趾の指がさはりぬ
外反拇趾に障りたる足を遊ばせて得たる座席に靴を脱ぎをり
常温に置きたるままの青菜類三分茹でて冷凍庫に入る
ひでり続き週に二日程雨降れば庭一面の草軽々と抜く
いつもいつも眠りにつく迄思ふことゆがみてゐたる愛といふ言葉
舌の先も老化するらし銜へたるカツに舌かんで血の滲みくる

正田 フミエ☆ 栃木

体調の不調となれば治療へと通いきたれる力まだあり
今までの畑作業のわれがあり治療に通う今のわれあり
えんどうに不織布かけて冬を越えはずせぬままに花の咲き出す
体調の回復なりて不織布を外すえんどうに春の日ざしが
つるありのえんどうなれば支柱など立てる力を家族に頼む
ジャガイモの植えつけ遅れ四月に入る体調もどるを待ちに待ちたり
子どもらの集団登校一列に十人の班の歩み見送る

飯塚 澄子 東京

日曜ごと我が寝具をば干し洗ひ夕整へる息子に感謝
掃除機を使ふ音する日曜日まめに事なす息子の愛し

桜餅持てくる詩吟の生徒あり四月の初め皆の机上に
早いうち何よりの味と桜餅先づ食したり卒寿の男
春休みスキー教室軽井沢祖母二人の子日帰りの旅
汽車の席ゆつたりと座す二人かな笑みの顔見るスマホに安堵
曾孫二人スキーを学ぶありさまを画面で見られ嫁に感謝す

齊 藤 トミ子☆ 栃木

振袖にブーツをはいて日光の社寺を歩める二十歳の彩里紗
きらびやかな陽明門の前に立ちポーズとる孫視線を集む

振袖の孫と写真を撮りたいとインドの女性に声かけられる

二十歳の孫と傘寿の夫を祝う会金谷ホテルにフルコース食む
SPの如く夫に添う悠太くり石の道難なく歩く

転けそうな時に素早く手を出しぬ我れにはできぬ孫の動きは
しゃがみ込み夫に靴を履かしくる看護師悠太の仕事を思う
決算をしつつ聞く国会の裏金問題空しくなりぬ

高 橋 耀 子☆ 埼玉

身延山団体旅行のバスに乗り和気あいあいの旅が始まる

後ろから前から菓子や茶が届く四年の空白埋めるバス旅

雨がやみ浅い緑が色添えて久遠寺までの桜が続く

富士山が山を従え見え隠れロープウェイ感嘆の渦

早朝の久遠寺よりの鐘の音が深く響きて山に消えゆく

青空を背景にして見ごろなる桜を見つつ心満たせり

一人行く花展会場活気あり無心にいける棕櫚の生花

活気ある街の朝を通り抜け花の手入れに勤しむ三日

浜 田 はるみ☆ 埼玉

暖かき部屋で降る雪見つめれば時が昔に戻って行きそう

濃い黄色フリージアの生け花は春が来たよと教えてくれる

描きかけの絵を描きたくない時はカラーペンにてデザイン画描く

外壁をカラフルな色に塗り変えた近くの家が二軒三軒

展覧会やってみたいが負担の大きい外の会場諦める

教室の皆の意見が一致して齢相応の展覧会とする

手軽なカルチャー廊下に展示決めそれでも準備は色々ありぬ

飯 嶋 久 子☆ 茨城

数本の送電線の張られていて雀数羽さえずりかくる

光の春森も田畑もきらめきて蟄居の部屋を抜け出しており

自然治癒待つより他なし肋骨骨折コルセットにてしめ上げらるる

この団地完成時にと植樹せるグラウンド囲む桜数本

共に年老いたねと声かける桜いとおし幹ひび割れて

グラウンドに盆踊りやら運動会歓声ひびく広場なりしが

ゲートボール、ペタンクなどを競い合う広場となりてよみがえりたり

十本の指踊るが如き速さにて娘は送信あつという間に

野崎 礼 子☆ 埼玉

桜とは心弾む花と思う我が頬撫でつつ風に舞いゆく
はらはらと散りゆく桜さようなら吹雪のトンネル友と歩みぬ
花びらが舞い散りゆく瞬間をカメラに収めて夏の到来
そこそこが一番と言う友がいて旅立つ朝は桜が満開
美味しいねポツリと一言その笑顔一杯のビール喉を潤す
中国の緑茶香る教室に文化に触れる時間が楽しみ
子の好きな抹茶シフォンを三つ買う今日は向き合い食べたくなりぬ

糸賀 浩 子☆ 茨城

鶯・雀・目白に鶯・椋鳥と数えて楽しむ庭に来る鳥
親ゆずり農の申告済ます我安堵の春をあと何年か
終戦後は猫の手よりも重宝と小学生われ苗田の虫とり
ままごとに春蘭の花きざみたる記憶はとおし「らん展」におり
バス停に立てる婦人は痛そうに腰たたいたり首まわしおり
封書などもう稀な今日飯粒で封のしてある手紙届きぬ
取り込んだ洗濯物をたたみゆく我が子の手つき我にそっくり
ひなあられ賞味期限の日をすぎて桜の餅に急かされ食す
岩 淵 綾 子 岩手
五色沼子らと行きける福島にわれ病む前の思ひ出なりき
百寿なる姑を見守る友二人真心があり微笑ましかり

三月三日三陸津波より九十一年われ生まれしより九ヶ月後とふ
ペランダの真下の庭に露の臺芽吹きぬるだに行けぬが悲し
珍しく枝垂れ桜にどか雪が馴れぬスマホに思はずタツプ
震災に「生かされた命を」元校長誰かのために役立てよとふ
3・11の平安祈り慰霊祭勿忘の鐘が鳴り響きけり
東日本大震災より十三年除幕と追悼のモニメント出づ

樗 木 紀 子☆ 東京

通院に足元を見て帰る道白木蓮の花弁見つける
道を渡り顔を上げ見れば満開の白木蓮が咲き誇りおり
押上から錦糸町まで街路樹の白木蓮が白い線成す
隣庭の桜六本つぎつぎと満開になり社を囲む
隣庭の大公孫樹は枝々に小さき小さき緑葉つける

田 中 祐 子☆ 埼玉

ビル風にいきなり巻かれ蹠踏めきて地に膝を突く大事は無くて
春浅き雑踏のなかベビーカーの幼の素足と薄着に気付く
童謡の順次流るる部屋うちに和みて何時か合唱してる
幼達へピアノ教えし嫁の選るCD何れもやさしき調べ
然りげ無く声量抑えて唄い呉る嫁のソプラノ「鈴懸の径」
今日のママ、機嫌悪いのと訴えき遙かな少女は保育士のたまご
植えたるを凍える冬に忘れ居て四月はじめをフリージア咲き初む

セピア色の聖戦歌集手にとれば我の知らぬ父母がある
雪柳こぼれんばかりに咲きみちて叔母の供花にとていねいに切る
夕つ方だれも居ない公園に半分とけた雪ダルマあり
幼らは菜の花畑であそびしか黄の花びらをあちこち付けて
園児らのはつらつとした声聞こゆ母さんの歌と鯉のぼりの歌
四姉妹墓所たづぬれば赤きボケ水仙咲きみて明るむ墓前
ああ四月花の時は巡り来て私のさくらに逢ひに行きます

林 美智子☆ 東京

傘寿祝うクラス会あり国立の桜二分咲きか程良く晴れて
国立の桜並木も年を経て植え換えられた若木が混じる（九十歳位）
あの頃の桜は二十七歳位溢れるように咲き誇りおり
桜、銀杏四季折々の自然あり通学の日々の大学通り
夕六時今日もムク犬三頭のお散歩が行く揃いのクツ履き
用水に枝を伸ばして我が庭のモクレンが今花盛りなり

石 本 啓 子☆ 東京

被災せし能登の映像観る度に我が身の今に思いを致す
息子との確執あれど老いの身は子に従うが正当なるや
春蘭や花芽あまたに葉も繁り十一年経つ義姉の置きみやげ
家並も昭和平成令和となり町会費集金に初めましてと

矢野 操☆ 香川

高齢に人の言葉で傷つかず許せる言葉人間だもの
目の前の友の話に目をみつめ入れた合の手目が笑い合う
使えない動作のろく自分への愛のない声はやくしなさい
服装やアクセサリーでふる舞をかざれずつと無関心とおす

松 中 賀 代☆ 高知

雨止めば直ぐ畑にとナバナ摘み三日の雨につぼみは開く
三月も終わりとやうに冬景色雨雪寒さ風も止みなし
午前四時はや新聞は届きおりどの家もまだ灯りは見えず
添いゆくは叶わぬ姉の旅仕度せめて生花をあふれんばかり
長年を桜の花も楽しまず百六歳の命おわりぬ
誠実に生き永らえて百六年最後に通る道は花吹雪
父母に夫の元へ旅立つに日ざしは優しく良き日となりぬ

本 郷 歌 子☆ 栃木

金と青の長き尾煌めく蜥蜴の子青苔の上駆けぬけてゆく
この豚汁の中に幾多の命あり我が命へとなりゆくものよ
四十年経ても少しも色褪せぬ梅の花咲く母逝きし時
青き羽根日に煌めかせ翡翠は一瞬にして小魚取りたり
ジャングルが出現したり部屋の中娘の好きな多肉植物
子の作るカフェオレ甘き香りして心に優し春の雨降る

音たてて降り来る雨に満開の桃は散りゆく下草の上

村上美江 岩手

桜咲く十五の春の乙女たち君らの行方に幸多かれと

三人の旅なり息子娘と吾近くの海の温泉愉しも

久々に親子三人揃ひ踏みこれより三役いざ温泉へ

海眺め黒崎の湯にて身を解けば冬の憂鬱溶けて無くなる

砕けては高くしぶきをあげる波幾度も寄せる南岸低気圧に

海の幸冬の「鈍甲どんこの唐揚」の定食頼み又海を見る

熱熱の「鈍甲の唐揚」サクサクと子供らと食む顔寄せあひて

伊澤直子 ☆ 東京

深大寺四年ぶりにだるま市この人混みを忘れおりたり

だるま市目入れの列は長蛇なり並びて目の文字「阿」に願かける

三月の空の青はパステル調すもの花のよく似合いおり

後楽園中山道を描く庭木曾川寝覚竹生島と巡る

「琵琶湖」抜け通天橋に渡月橋京に行き着き旅は終りぬ

孫娘小学校の卒業式袴の試着を前日手伝う

今どきの小学校の卒業式袴付けたる子の多きこと

乾義江 ☆ 茨城

戸を練れば端から端までベランダにくっきり見える獣の足跡

夕影に隣の壁の照り返し眩しいばかり我が部屋に入り来

夜半より風吹き抜ける春嵐の朝を迎えて鳴りを潜める

草枯れて乾く畑地の中程に上下に尾を振り走る鶴鴿

道沿いの製紙工場のカラフルな煙突の煙北へと棚引く

収集の網を掛けたる芥袋の側をうろつく大きな鴉

庭隅に咲き始めたる黄水仙日差しのかなかで風に揺らめく

バス停 永光徳子 ☆ 東京

バス停のベンチの横に咲き競うタンポポの黄と母子草の黄
踏まれても摘まれても尚咲き出づる小さき花達笑顔を誘う

初夏からはガードレールの内側に立葵の花華やかに咲く

満開の桜並木は遠けれど突風に乗り花びら舞いぬ

病院の前にバス停設置され白いベンチは疲れを癒やす

一時間に一本だけのバスを待つしろつめ草の四つ葉探して

漸くにバスに乗り込み眺むれば銀杏並木は緑萌えたつ

稲津孝子 福岡

雀より小さく嘴尖る鳥近づき見むとすれば躓く

窓のそと音して雨の降りてきて何する事のなく立ち上がる

服を縫いてお代に頂くカーテンで母の作りてくれしワンピース

咲き初むる櫻の下に立ちませる地蔵は眼を細めてをれり

義母のため更に夫のため取り付けし手摺に助けらるる事あり

胸のポケットに計算尺をいつも持ちその度使ひてゐき電気技師の父

布を裁つ大きな鋏で御河童に髪を揃へてくれにき母は

戸部田 とくえ 福岡

紅くひなの八重の椿の咲きくれば心にしまふ古里のべに

幼きころ目にした椿のくれなるの老いて尊ぶ咲きくる庭に
躓いて倒れる道に強打せる恥ぢらひつつ払ふ土埃

庭に摘む露の臺せりおひたしに自然の恵みしみじみ尊ぶ
ブルーベリー視力回復すすめられ縋る思ひに信じて買へり
友からの手紙に記念切手同封その心根に謝意をしたたむ
乗り合はす幼の仕種みつめつつ「何を思ふや」その穢れのなさ

大塚 照美 兵庫

年どしに桃咲きたれば隣より枝を束ねて賜びし節句に

娘婿のみづから干せる椎茸をしかと煮含め毎日の膳に

頼りなる二本の足も危ぶめば杖一本を軽んず勿れ

敷く小石のぞきて庭の草を引く終はれば並ぶ石のモザイク

職退きて磯釣り三昧なる義弟に三杯酢のべら三尾もらへり

骨格の検査あすなる西空に下弦の月のあくまで赤し

脳神経検査後むすめの車より満開のさくら見る遠き近きの

吉村 昌子 千葉

土曜日に夫が作るホットケーキ両の隣りと友に持ち行く

体操のある日は夫のホットケーキ先生が待つまだ温かいのを

器用なる夫が皮むき作りたる干し柿食ぶるわれ一つづつ

この夜は星が良く見えその中の動くは飛行機羽田の方へ

電線に雀が六・七・八・九羽われの方見て餌の催促

お隣りにきれいに咲けるチューリップ三鉢持ち行く肥料ほどこし

鳥達まぶしいのかしら日ざし背に電線にをり仲良く並び

井上 槇子 新潟

この冬も飼猫の異変を娘この言ひて医師の診断は喘息なりと

餌や水飲み込み悪く扁桃の腫瘍と医師の診断変はる

都の病院の紹介受けれど回復の薄きにICUの治療の続く

面会に這ひ寄る猫に娘とわれは家の看取りを決めて連れ来る

臨終を告ぐる婿の夜の電話娘の泣く声に聞き取りがたし

猫逝きて頼みおきたる霊園に娘と婿みたりと三人にて葬儀す

般若心経唱ふる僧のニャンニャンと入るる経にて一瞬癒さる

煙突より出づる陽炎うらうらとしみじみ仰げば動くうす雲

鈴木 やよい 東京

電車遅れもう間に合はぬと諦めてゆるゆる付きゆく人の流れに

寺の門くぐりて先づは確かめる彼岸桜は咲いてゐるやと

陽に映ゆる彼岸桜は三分咲き暫し見上げて墓所に向かふ

春の日の植ゑ替へに掘る黒き土しつとり湿るを素手にて触れる

乗換への在来線をじつと待つ喪服入れたるバックを下げて

母の葬儀終へて帰宅の次の日はただ黙々と春の草抜く
「そのうちにいいこともあるさ」が口癖の母の声ふかく耳に残れり
花見客の賑はひのなか歩みゆく曇りの空に桜が白し

中 島 千加子 東京

いちばんに美しきまま風のなか桜の花は散るために咲く
土のうへ赤みを増して降るさくら潤ひてみるやはき花びら
きみならば桜の房に手が届く想像しつつシャッターを切る
刈られたるはずの花に勢ひを戻し道端いつぱいの白
うつすらと紫がかる白き花小きはななら柵越え伸びる
富士山を見ながら通勤する路線区切られぬ空は夢のイメージ
法制度に救はれぬ人が多くある政治がつくる差別偏見
死にたきほどつらき人にも花は咲く均しく咲きぬこれこそが愛

山 本 三 男 ☆ 群馬

パトカーが視界に入り切り替わる信号に急なブレーキを踏む
スーパ―に子供が多くいる見ればわが知らぬ間にもう春休み
胴切りしきゅうりの如きサポテンを垂直に立て根の出るを待つ
関わりを拒否する如くトゲ繁るサポテンをわが玄関に置く
消しゴムで消してばかりと妻は言うパズル解きいるわが様を見て
ひたすらにペンシルパズルに没頭す数字の世界にうれいは無く
締め切りにひと月余す大会に参加を決めてメールを送る

返信はエストニアよりすぐきたりグッドラックの添え書き嬉し

中 村 哲 也 宮城

道脇のたぶん去年と同じ場所白き水仙数本咲けり
咲き初むる後に晴天続きみて今年は桜を長く楽しむ
平日の午後に珍し父からの電話で母の骨折を知る
折からの帰省予定の弟の家族に託す母の入院
入院の母の声より独り居の父に張り無し電話に聞けば
桜咲き外は夏日にフルートの演奏聴きに電車に向かふ
仙台の桜の名所の最寄り駅榴岡まで車内込み合ふ
伴奏のペダルハーブの響板は一枚板か否か気になる

(☆印は新仮名遣い希望者です)

原稿募集

編集室では、会員の皆様から左記
のテーマによる原稿を募ります。

記

● 島木赤彦の一首鑑賞

皆様が赤彦作品ならこれを選ぶ
という一首について自由にお書

きくください。

● 先ず作品一首を二行分でお書き

頂き、その後、

* 本文 25字×17行

でお願いします。末尾にお名前
を入れてください。

● 締切日は、毎月15日とします。

* 尚、掲載について細部はご一
任願います。

● 宛先は編集室。

冬雷ホームページのネット歌
会に参加しよう。希望する
二首を選んで、事前に申込み
ます。
活発に動いています。
(広報係)

参加希望者は「広報・桜井美保子」
宛に最新号掲載作品から2首を
選んで申し込む。批評を受け、自
身も批評に加わることが出来る。
小誌ホームページにて今までのも
のが閲覧できる。ご活用を。

 冬雷ネット歌会

四月号作品一評

小林 芳枝

きつちりと足を包める五枚こはぜ白足袋に踏む稽古場の床 桜井美保子
お稽古の為の着物を着る前に足袋を履き、気持の締まる感じが快い。ひんやりとした稽古場の床の感触も伝わる。
リハビリのバイク漕ぎつつ眺めおり男体山や白根赤城を 斉藤トミ子☆
体調を崩して入院中であるがりハビリをしながら山が見えるのは励みになるだろう。もう一度あの山に登れることを目標にして頑張ってほしい。

一つずつ同じ動作に豆食べる六十年を共に生き来て 高橋燿子☆
節分の豆撒きの後に齢の数だけ豆を食べる慣わしがあるが同じ動作で豆を食べるのはご主人か。仲の良いお二人の姿が髣髴とする。婚六十年というのも素敵だ。謎めきて其でいて麗し表紙絵の月下美人に暫し見惚るる 田中祐子☆
今年の表紙絵には嶋田画伯の特別な思

いが籠められているのではないかと私も感じていた。ずっと見ていたくなるような不思議な感覚に包まれる。この歌には田中さんの感じたままが詠まれている。亀だつて長く暮らせば簡単な言葉は分かるかと友の言うなり 林 美智子☆

この亀には「ラッキー」という名があるらしい。友が呼べば顔を上げて答えたりするのもかもしれない。作者は少し疑問に感じているようだけれど、家族として長く暮らして解ることもあるのだろうか。確信を持っていてる友の言葉が楽しい。乗客は吾れ一人なり市営バス終点までを無言で無事に 松中賀代☆
バスの客が自分だけという時の緊張感が結句から伝わってくる。私も若い頃に夜の習い事で帰りはいつも終バスになってしまひ三十分程乗って帰宅していたことがある。時には運転手と自分だけという事もあり停留所が伝えられる度に車内で妙に畏まっていたことを思い出した。

春の日は庭の隅まで降り注ぎプリムラの苗立ち上がりいりる 永光徳子☆
悲しい顔してほしい日もある娘どこから見ても笑顔の遺影 糸賀浩子☆
作者の悲喜交々の日常の中で娘さんに聞いて欲しいことを呟く事もあるのだろう。そんな時もういつも笑顔の娘さん。作者の気持ちに寄り添って下さっていたか

「庭の隅まで」という丁寧な表現で庭の印象が鮮明に読者に伝わってくる。プリムラという小さな植物の育つ様子もみえて明るい。

われのみのリハビリ廊下を十往復過ぎし夫の部屋あたりまで 大塚照美
入院中の歌なので足が弱くならないように自分で歩いているのだろう。嘗てご主人を看取るために通った廊下を患者として歩く思いは如何許りであろうか。無事に退院されたようではとす。

略式の法会いとなむ副住職は輪廻転生明快に説く 井上楨子
副住職はご子息であろうか。立派に父の代りを務めた姿に母として安堵の気持が込みあげる。下句の具体的表現には自信をもって法話を語る姿が浮かぶ。
葉を巻かぬ白菜畑に残されて思ひのまにに広がりてをり 鈴木やよい
葉を巻くことのできなかった白菜は役立たずなのだろう。しかしそんなことにめげずどんどん自由に葉を広げてゆく様子には生きる喜びと逞しさがある。

四月号作品一評

藤田 夏見

船の名で呼び合ひ漁師ら円座なく網を繕う小春の岸壁 田端五百子
船の名前で呼び合うのは、同姓が多いからだろう。日なたの岸壁で其々が、大きな網を広げて繕いながら軽口を叩きあい漁の情報交換をしている姿が見える。
来客を知らせるチャイムに降り行けば針仕事の糸ら共につきくる 野村灑子
チャイムの音に急ぎ立ち上がった作者はちやうど針仕事の最中だった。糸くずなどは衣服に吸い寄せられる困りものだが、作者の日常の一コマを擬人法で。

食べて直ぐ横になるなど夢のように三食昼寝付きの入院生活 斉藤トミ子☆
思いがけずに始まった入院生活に生業の事など心は落ち着かない作者。元気で家業に精を出していた頃は時間を惜しんで働く人だったろうが、三食昼寝付きは夢だったのに。と口にする時はユーモアを忘れない作者か。

春の日は庭の隅まで降り注ぎプリムラの苗立ち上がりいりる 同
永らく慈しんで来た庭木を伐採され日本酒を注がれた。日本の神道の心を思うと共に、作者の愛着を切り離す為の祈りでもあったのだらうかと考えました。大きな木立が消えて庭隅にプリムラが明るく咲く日も近いのですね。

永光徳子☆
永らく慈しんで来た庭木を伐採され日本酒を注がれた。日本の神道の心を思うと共に、作者の愛着を切り離す為の祈りでもあったのだらうかと考えました。大きな木立が消えて庭隅にプリムラが明るく咲く日も近いのですね。

永光徳子☆
永らく慈しんで来た庭木を伐採され日本酒を注がれた。日本の神道の心を思うと共に、作者の愛着を切り離す為の祈りでもあったのだらうかと考えました。大きな木立が消えて庭隅にプリムラが明るく咲く日も近いのですね。

数多なるマスコット付ける受験子のバックバックにお守りはなし 吉田好子☆
現代っ子はマスコットキャラクターの幸せのお裾分けを貰おうとしているのかしら。神社仏閣で頂くお守りと同じ意義を感じているのかも、お守りもマスコットも持たない孫に聞いてみたいです。

外灯の光に現る吾が影は何を悩むか俯きて歩む 鈴木やよい
何かを悩むように俯きて歩むのは、外灯の光に現れた自分自身の影のようだ。明るい昼間は元気に振る舞い一日を終えて、ふとわれに帰った時に見つけてしまった不安のようなもの、そうゆう影を時としてわたしも見るようなものがあるようなそんな一首。

今日のそら青く綺麗と語る手話ひかりのいろの蠟梅香る 中島千加子
今日の青く綺麗な空を手話で伝え合っている。空の透明感は蠟梅の花を透き通らせてひかり色となりそのフルーティーな香りに包まれる二人でしようか。

六月集

梶尾 栄子 兵庫

コンビニの解体いとも簡単に夕方通れば跡形もなし
常ならば満艦飾の干し物の昨日今日見ず黄砂の飛来に
講演の先生匂ふが如くなりすみれ色なるワンピース似合ふ
夫逝きふた春過ぎぬ散りかけのつつみの桜見たるが最後
梅檀に未枯れつつ残る数多の実花咲くごとし雪被くごとし
景気やや上向き漸く残業の灯り点をうれしく見をり
晩年はペーパードライバーたりし夫に免許更新知らせの届く
木にとりて良し悪し知らねど紅梅は見事に咲きぬ剪定休めば

本間 志津子 山形

風花のひらひらと肩に降りかかる青空の中に小さき雲あり
晴るる日の日差し明るき午後街に吹き入る風の冷たさ
運転手不足のゆゑと月山道バスの二便が運休となる
これからも人手不足はひたひたと人の暮らしに迫り来るのか
空港へ飛行機雲の三筋伸び薄れゆくなり風あたたかく
山巒を埋めゐる雪の深々と遠き山並みいまだに厳し

俄か雨ゆきずりに傘さしかくる人と歩めり次の角まで
目覚むれば窓に眩しき光あり春はすぐそこ息深く吸ふ

川上 美智子☆ 高知

吾の胸に優しき笑みを残したるまま友は去る娘の住む奈良へ
娘の傍に余生を託すと決めた友不安の多い転居と言いつつ
整地され広がる畑の片隅に雨水溜まる足跡二つ
農薬を使わず作る友よりの野菜に穴と虫喰いの跡
木々の間を飛び交う野鳥鳴き交わし裸木の新芽ぐつと膨らむ
大空にばら撒くごとく拡がりて梅檀の巨木に実の数多生る
桜咲く並木の堤は華やいで卒園式終えたる親子連れゆく

大野 茜 神奈川

八寸の苗木育ちて実が四つ冬日にレモン輝く黄色
パンジーの黄色を狙ひて食べ尽くす窓を開ければ百舌鳥の飛び去る
亡くなりし兄の葬儀に喪服出しアイロン掛けて鴨居に吊るす
腹部診る検査の前の血圧が二十も上がる私の神経
大地震襲ひたる能登の映像に自然の脅威を脳に刻みぬ
生垣のつつじの枯れたる葉に隠れ赤き一輪けなげに残る

児玉 孝子☆ 愛知

結婚式すると女孫の招待状くれたる其の日明日となりけり
和やかに笑顔溢れる家庭築く花婿の誓う声胸に沁む

ウエディングドレスの孫と並みて今カメラに写るは夢のごとしも
晴天に庭に生うる草とり終えて動けたる吾を声出して褒む
満鉄に勤めたる叔父の法要にソ連に捕虜の話浮かびくる
豌豆は蔓を絡ませ花の咲き弥生の光に力溜めおり
畑中に増えたる水仙香りたち寒から春へ五種の咲き継ぐ

三好規子 神奈川

年どしに散歩に見上げし公園の紅白の梅を籠りつつ思ふ
腹出でて数年前のコレットきつくなり来て三度目の新調
春分の日の朝やまより鶯の啼く声きこゆこの年初の
横浜の老舗ホテルの京料理の店に連れくるる婿わが生日に
ご馳走を食べつつ思ふ戦争に追はれ飢ゑたる多くの子等を
マッカーサーの泊りしホテルの中庭の噴水前にて記念の写真
美容液とフェイスパック剤を誕生日に孫が贈り呉る皺多きわれに
黒色のパンツスーツにネクタイを締め入学式に出るとふ女孫

小林貞子 山形

堅香子のひともと紫極まりて一輪草の中に誇りか
暮れ泥む春の外面に老い二人伐らず仕舞ひの庭木を語る
ナニワズの黄花ほろほろ散りこぼれ仄かに放つ香りの甘し
清明の空に蒼の膨らみて梅の小枝へ温き風寄す
朝方の雨は煙りて柔らかく柳のみどり深めて降りぬ

山茶花の桃色の花咲き続く椿の花と春を分け合ひ

勾玉の向きを逆さに継ぐかたち抱き枕とふを喜寿に賜る

「私本太平記」傍らに置き父読みし手擦れと染みの今も懐かし

西村邦子 兵庫

古里の山削られて変はりゆく記憶の風景つなぎあはせぬ
開発の道路のそばに残りたる父愛でたりし山桜の咲く
芦屋川六甲の山並み背に抱きて小さな街が桜に染まる
遙かなる霞む山並み山桜辛夷ながめてバスに揺らるる
一年を経たるシニアカレッジがきつかけとなるマインドリセット
もう少し知らないことを知りたくて入学したるカレッジ大学院
若きころ義姉とは遠かれど歳を重ねて近くなりたる

藤田夏 見☆ 広島

白砂に煌めく波の影あそび厳島神社は潮ひきはじむ

シャッターを異国の人の押しくれる家族揃える大鳥居の前

「資料館は嫌」と怯える孫の手をそつと繋ぎて折り鶴の塔

多国籍の人に混じりて孫二人平和の鐘を静かに鳴らす

ピザ窯の温度あげんと一時間薪を注ぎおり炎の中に

うっそうとゆく手をはばむ椿の枝にチェンソー当てる女孫は二十歳

切りはなつ枝は次々軽トラックへ孫らの賑わい森の中より

軽トラックに二度運びたる小丸太はピザ窯の脇に小山となりぬ

残響集

佐々木 政 子 岩手

幾度も心配なきを医師言へど老いは病状くり返しいふ
日陰なる斜面にみづなとりながら木の葉がくれの沢の音きく
茄子漬の分量教へる声の我にも聞こえ車中にメモす
われと同じバッグ持つ人とすれ違ひ振り向けば我も振りむかれたり
納めたる写経は秘仏に供へられ数多の人がをろがみくれぬ
海原に時雨降りみて向う嶺に五色の虹が弧を描きをり
夜半に入る温泉の湯は浴槽をあふれて浅きうねりとなれり
漁あらば平目上げると言ひながら漁師は軽がる船に飛び乗る
声低く友に謝りゐる人の時にきびしき眼差し見する

立 石 節 子 ☆ 東京

窮状を伝える募金に応じつつわが身の無力悔しく思う
錯覚か去年の夜桜の鮮やかさ今年は暗く静かに立てり
人死にて消えずに残る足跡にその人らしき歩みを見るも
コースで九十歳のテノールは臍臓癌のち二十年経つ
湯船から手足を挙げてその重さ味わう我が身を支えて強し
枯れ庭に次々と咲く花を見て先住のひと想いて楽し

「引力」と小三の子は力づよく半紙に書いて提出したり

メモ帳に必ず書いてありながら気にかかる事先に済ませり

井 出 裕 子 静岡

弟の古稀の祝ひに久々の港見下ろす清水の地訪ふ
家族らに囲まれ座る弟ははしやぐ孫らに目を細めをり
吾に残る記憶の始まりは三歳の縁側で聞きし弟の産声
目の前で笑み浮かべ居る弟の髪には白きが多くなりけり
祝ひ品の鞆を掲げ弟はまだ仕事続けると家族らに告ぐ
五輪出場決め池江選手目を閉じてしばしプールに手を合はせをり
入江選手五連続出場叶はずも若き代表を見る目は清々し

越 澤 太 朗 ☆ 茨城

縁ありて農の仕事をして九年土の匂いにひかれてやまず
今は只十年めざして頑張ろうわが手も足もまだまだ動く
我が畑は遊休農地と云われ来て地主六人我を見守る
ペン持つ手にクワ・カマ握り早九年ペン胼胝も日焼けしたる手を見る
雑草と云われる草を地に埋める耕す畑の滋養となれば
トラクターの運転友に教わりぬ農のイロハは体で学ぶ
農薬を使はぬ野菜作りつつ日々の暮しを感謝で生きる
天気良し畑へ向かう軽トラの四駆のエンジンのもしくあり

(☆印は新仮名遣い希望者です)

吾が心映しているか白梅は踊っている
よう晴れたる今日は 石渡静夫☆
待ちわびた晴れ間だったのだろう。花
が踊って見えるほど眩しい陽光が降り注
ぐ。飾らない表現が春の喜びを率直に伝
えて来る。

殺されし子らの映像絶え間なくネット
に流れ来ガザの虐殺 須藤紀子
インターネットでは異国の情報もほぼ
リアルタイムで手に入る。悲痛な状況を
「絶え間なく」見る。見せられる。戦火
のない国で。「殺されし」の持つ無残さは、
命がもはや過去のものになってしまった
事実を容赦なく突きつけて来る。

雪の後の庭に一輪クロッカス小さけれ
ども黄の色強く 川俣美治子☆
雪の中にクロッカスを見つけたうれし
さ。太陽を模したような明るい色は、冬
の間に萎れてしまった心を励ましてくれ
たのだろう。まだ寒い時分にいち早く咲

くクロッカスは、昆虫の貴重な食糧源だ
という。だから目立つような色をしてい
るといふ説もある。

大部屋に移って響く大いびきに心配事
を一時忘れる 豊田伸一☆
大概がいびきは迷惑なもの。でも眠れ
ず、不安に苛まれていた人にとっては、
同じ空間に誰かの存在を感じるきつかけ
となり、ほんの少しだがほっとする部分
があった。淡々とした調子で詠まれてい
る分、身につまされる。

定年のなきわが仕事の帰り際二つ星光
る西の空見る 佐藤幸子
定年がないということは、仕事を辞め
ることも続けることも自分の意志ひとつ
ということだ。自分が決めなくてはなら
ないから悩む日もあるだろう。でも夕空
の星は作者の心だ。星は星の場所で今日
も光っている。明日もきつと光るだろう。

寒の水まだまだ含む黒豆かバケツの中
に盛り上がり来る 藤田夏見☆
「まだまだ」、「盛り上がり来る」に迫
るような勢いがある、小さな豆に秘め

られたエネルギーが感じられる。水を存
分に吸った黒豆のつやまでが思い浮か
ぶ。

春立ちぬ芽吹きのコぬれ赤帯びて日永
の空に淡く煙れる 小林貞子
この歌の古典的な言葉づかいの魅力
は、声に出して読むことでいっそう深ま
るのではないだろうか。早春の木々の枝
先の細やかな観察と描写が美しい。
売りました二百円なり寂聴訳源氏物語
全十巻を 笹岡文子☆

さまざまな思いが凝縮された「売りま
した」に共感して、ため息をついてしまっ
た。大切な全集を手放すことを決めるま
でさんざん迷われたことだろうに…。
擦り切れたスニーカーなれど捨て難し
日々の迷いを語りし相棒

金子八重子☆
こちらの歌には手放せない様子が詠ま
れている。気持ちが揺れる時これを履い
て外の風に吹かれてきたのだろう。「相
棒」という呼び方に温もりがある。

■島木赤彦の一首鑑賞 4

我が病ひ悪しとあらねど遠国より来りし人にむかへ
ば泣かゆ 島木 赤彦

近代短歌史に新風を吹き込み大きな足跡を残され、そ
の運営にかけた労苦と心労は如何ばかりだったかと思わ
れてなりません。その反面、私生活に於いても大変な苦
労があったことが歌集には見受けられます。

まずは赤彦が大病で手術なされた歌や、大切な子息を
亡くされた歌、その上、老いた父母様を抱えて、次々襲
い来る苦しみのなかにも、精力的にあちこちの旅先で書
かれた作品に接し、よくこの中で仕事をなされたものと
感心させられ、情熱的な方だったんだなあと思いました。
最後はまだ五十歳という年齢で若く、二度目の大病と
の闘いがございました。公私共に苦渋にみちた一生だっ
たのではないかと思いました。

赤彦晩年の日々、尋ねてくれる友に接した時には互い
に涙だったことが目に浮かびます。その時の心情を思い
ます時、私は不覚にも涙したことでした。

(乾 義江)

島木赤彦研究会入会案内

- 島木赤彦研究会は昭和45年に設立。支部は昭和49年に長
野県支部として設立。
- 会長 高橋 克
- 島木赤彦研究会は、近代日本文学および、近代教育にお
ける島木赤彦の業績の資料保全と、調査研究を目的とし
ています。
- そのための研究活動として、研究大会の開催・資料展示
会・東京例会・支部研究会などを行っています。
- 投稿などの機会が得られます。(年会費二五〇〇円)
- 本部事務局 江戸川大学 高橋 克 研究室内
〒270-0198 千葉県流山市駒木四七四
☎ 〇四(七二五)〇六六一(代表)



行き場なく避難する人らに容赦なく断水停電寒さが迫る 本間志津子
能登半島地震一連の中の一首。避難生活だけでも難儀なのに、断水停電寒さという追い討ちが難儀さを物語る。

裏門に墓地より人の現れて礼をしてよりに去りてゆきたり 佐藤靖子

裏門はどこかの裏門か、そこが墓地に続いているのだろうか。人は無言で礼をしていったのだろうか。ドラマの一場面のようで、不思議な魅力がある。

子の供養の朝ごとの経のお勤めも三十九年目なりまだ続く 東 ミチ

逆縁の悲しみを表面化せず、三十九年の経のお勤めと言ひ、生きている限り続けていくという。言葉には言い尽くせない深い悲しみが、数詞に表れている。

日本橋の高層ビルの路地裏に稲荷祀らる柏手を打つ 大野 茜

建造物は建てるも毀すも許可さえあれば

ば自由だが、神社仏閣の信仰のついでに物はままならない。大都会の都市事情を背負ったお稲荷さん、柏手打つ大和心。

歌の友と落ち合う駅は後免駅「ごめんな祭」なる祭りのある町 川上美智子☆
歌の友にごめんなさいと詫びる理由もないのだろうか、「後免駅」で会うところがおもしろい。固有名詞の生きた歌。

小春日の幸せもらふ散歩道赤塚山のどろんぐり拾ふ 吉岡松世

小春日和だけでも温かいのに、赤塚山の「赤」、どろんぐりと温かい色で、秋の日和が柔らかに穏やかに詠まれている。

土地いつばい三階建ての民家建ち小学校のさくらの隠る 松本英夫

三階建ての家を作るのだから、そもそも土地は広くないのだろう。都会の土地事情があり、窮屈感があり、校庭の桜の見えなくなつた残念さを婉曲に詠む。

はじめての腰痛味わいおろと子ら帰りたる一月五日 小嶋知葉☆

正月に無理をして腰痛になつたのだろうか。一月五日がそう思わせる。子ども

四月号作品二評

江波戸愛子

冬の日の暮るるは早く帰る娘の尾灯見送る角曲がるまで 梶尾栄子

もう少しいてほしいと思ひながら娘さんの車を見送る寂しさと無事に帰宅ができるようにと願う母親の気持が伝わる。下の句の尾灯見送るに外の暗さが判る。

空色のビーズの小さなまぐちがにぎり福いつつの坐処となりをり 佐藤靖子

にぎり福は「愛・健・財・学・福」の五つを握り込んだお守りで鎌倉本覚寺の縁起物、毎朝握ると願いが叶うという。その五つのにぎり福の坐処が佐藤家のビーズのがま口になつていたという。握り福のなかには財のお守りもある。

ありがたう言はれて幼き頃の子の言葉に返すどうもしまして 鈴木計子

「ありがたう」と言つたのは大人になつたお子さんでありそのお子さんが幼い頃に作者に返した言葉をそのまま大人になつたお子さんに返したという仲の良い親

子関係がみえる。

断捨離に残し置きたる和筆筒の中身は茶の湯にいそしみしもの 東 ミチ

歳を重ねてくると身のまわりの整理をしようと思うこともあるが筆者は娘たちに委ねることにした。作者にとつて茶の湯にいそしんだ着物や道具類は大切な想い出の品物、自身で処分は難しい。

菜園にねぎだけ植えてこれからはなにを植えるか考えてみる 早乙女イチ☆

菜園に野菜を育てる楽しみと収穫を待つ楽しみが読む側にも伝わる。ねぎのほかに何を植えたのだろうか。

四年振り芝公園の更科に集ふそば好きメンバー欠けず 大野 茜

マスクを着けるのも自由になり出かける人も多くなつてきた四年ぶりの蕎麦屋にメンバー全員がいる喜びを詠む。

土地いつばい三階建ての民家建ち小学校のさくらの隠る 松本英夫

毎年小学校の桜を楽しみにしていたのに家の中から見ることが出来なくなつてしまつた寂しさを詠む。筆者の家の周り

達が帰って支える人の居ない不安がある。新聞に日の入り一分伸びること日日照かめて春を待ちみる 松居光子

一分は約三ミリの長さ。一日三ミリでも日々重なつていけば、日の長い春が来る。春を待つ思いに共感する。

浮き出づる月下美人の表紙絵に父を思へり年どし咲かせき 三好規子

「浮き出づる」がぴつたりの表現。大輪で気品があり、それが一夜限りの花であれば魅力は大である。父と月下美人、冬雷を手にする毎に思い出すであろう。

粒のあるご飯食べたしと看護師に伝へて得たる退院の許可 齋鹿ミヤコ

回復の兆しが粥からご飯へと変わる。「粒のあるご飯」が独特で、歯応えのある物が食べられるなら大丈夫という、退院許可の理由に病状を思わせる。

ハイネックセーター着たる鏡の顔あらまあ描きたる眉が剥けてる 内垣米子
これはままあることよ。女性なら多くの人が経験しているかもしれない。「あらまあ」の普段使いの言葉が生きている。

も新築一戸建ては殆ど三階建てです。

外出先に昼餉とらむと入るカフェにアクリル板の復活しをり 松居光子

外出時のマスクの着用は本人の判断にゆだねられたがコロナに罹患したという話を最近では聞くことが多いのでこの歌を頷きながら読んでいます。

月下美人の萎れたる花を持ち帰り酔の物づくりき留守居の夫に 三好規子

作者のお父様の咲かせた月下美人の花でご主人に酔の物を作つたと詠む、あらためて冬雷の表紙絵に見入つた。

聞かずとも入院先の評判の良きを語りて呉るる運転手 齋鹿ミヤコ

タクシーの運転手さんだろうか良い方に巡り合いましたね、入院の不安も和らいだことでしょう。

好奇心ありて魚の内臓も臆さず捌く十歳は 西村邦子

包丁を祖父に譲られ一人立ち皿に並べる鰯の刺身を 同

お刺身を囲み弾む声聞こえるようだ。

介護の手増える姉住む施設宛て片手で穿けるソックス送る 小田原禮子
施設で暮らす姉に片手で穿けるソックスを送るといふ。介護スタッフへの負担を減らす心遣いもあるが、何より自らの力のできることを提案する作者の姿勢と優しさに打たれる。

火事ありて学生時代の店なくもあちこちからはあの日の喧騒 新井光雄☆
大学生の頃、横丁の店で友らと飲みながら世の中への激論を交わしたようだが。のちに大きな火災があり、その店も焼失したが、思い出は今も心に。下旬に懐かしむ思いが強く出ている。
凍りつく大鉢の中に湯を注ぎ小鳥の為にとけるのを待つ 谷田律子☆
屋外に置いてある大鉢の水が寒い朝には凍っている。ここに来る小鳥の為に氷を溶かしている。小さな命への思いやりの心が感じられる。

日曜も「能登に居ます」とふ返事医療チーム率ひて吾子は 奥山清子
この度の能登半島地震で被災した方々の医療に尽くすチームには日曜も祭日もない。医療チームを率いる子の中で応援しつつ、無事に活動することを願っている。無駄のない表現で親子の心情が伝わって来る。

手術前の夫のメールはことごとくわれの心配雪の心配 井上鈴子
豪雪地帯に住む作者。病気を治すため手術を受ける夫からのメールを読む。そこには妻への気遣いと雪を案じる言葉があった。夫婦の愛情が滲む作品。
満洲で敵からのがれ逃げ惑う夢で安堵し暫し眠れず 立石 節子☆
作者は子供の頃満洲で過ごし一九四五年八月、ソ連侵攻から逃れるため家族で苦勞された体験を持っておられるのではないかと思った。夢でよかったと安堵する気持ちに共感する。
舞ひ上がり簾の如くふぶく雪は煙となりて枯野染め行く 羽田孝輝

「簾の如く」が吹雪の様子を読者に想像させる。雪は更に煙となり枯野を覆っていく。詩情を湛えつつ雪の日の情景を捉えている。

底冷えにぬくもり求め夕食にだんご汁作る今日は大寒 首藤文江☆
寒さが厳しい日には体を温める食べ物が必要になる。だんご汁はそんな時にぴったりなのだろう。二十四節氣の一つ「大寒」が結句にうまく収まった。
雪がやみヒヨドリ達が忙しく雨天の夷を食べつくしたり 永井亨子☆
雪の降っている間は姿が見えなかつたヒヨドリ達。雪が止むと雨天の夷を見つけて食べ尽くす。生命力あふれる描写で明るい一首となった。
老眼鏡かけて昔の楽譜出すブルグミュラーは今も新鮮 片桐美穂子☆
若い頃に使ったピアノの楽譜を大切に保管してきた。「老眼鏡かけて」に歲月の流れを感じる。年齢を重ねてもワクワクする心が健在。これからも音楽を楽しんでいただきたい。

コロナ禍に四年の月日飛び越せり二月の曆確かに閏 小田原禮子
新型コロナウィルスのパンデミックからの四年間。恐怖と不安と混乱と。厳格な制限により社会も生活も激変した。この間の思い出が殆ど無い。空白の年月を思うと上の句が身に沁みる。曆は再び閏年に。もう四年が過ぎ去ったのだ。

「よういどこらさ よういどこらさ」厚着する服手繰り上げ義母に湿布貼る 津田美知子
高齢の患者さんの皮膚を診察するため「どっこいしょ」と重ね着している服や下着を持ち上げることがよくある。作者の地方は「よういどこらさ」といふ。掛け声が独特な雰囲気醸して効果的。
北風の窓打つ夜は眠れずに芯まで寒い布団の中で 谷田律子☆
厳寒の冬、布団を被っても肩が寒くて眠られない夜がある。芯まで寒いのは体

だけのことではないように思われる。

山形は夫と出会ひし街なりて病院の窓に雪の蔵王山 井上鈴子
筆者も学部生の四年間を蔵王の麓の学部とポリクリの大病院とに過ごした。窓から蔵王が見えていたのかも。余裕がなく眺めた記憶が無い。残念だ。冬の蔵王の樹氷原でのスキー、山頂でご来光を拜んだこと、蔵王の山道で見え続けた中秋の名月が忘れられない。

十六年間犬と歩きし散歩道いまは自動車に折折通る 山崎 猛☆
十六年も一緒に散歩した犬がいなくなつてからはあまり通ることもなくなつた道。結句に懐かしさと悲しみが込められている。作者にとつて本当にかけがえない存在だったのだろう。
かたことようやく「ママ」と言ひし吾子もしも生あらば子の居る齡 塚本節子☆
可愛い盛りの幼子を失つた悲しみの深さに言葉も無い。万葉集巻五の九〇五「稚ければ道行き知らじ幣は為む黄泉の使負ひて通らせ」とあるが、子を無く

した親の嘆きは千三百年前も同じなのだ。暗き朝猫が布団に入り来るわが身ずらして体撫でやる 羽田孝輝

猫を飼つたことがあるものなら誰もが経験したのであるう心安らぐ至福の時間。筆者も、癌で死んだ猫が、最後に布団に入つて来た時の喉を鳴らす音、体のぬくもり、毛の感触が今も残っている。
青空をゆつたりと飛ぶ飛行機は海原を行くサメに似ている 永井亨子☆
大空に浮かぶ飛行機を見上げて（おそらく空港に近づき高度を下げて飛んでいる）作者は腹の側から眺めたサメのように。発想が柔軟でユニークだ。
ストレッチポールに背を乗せゆらゆらと脳を揺すれば歌生まれるか 片桐美保子☆

ストレッチポールとは細長いマット状のもので背を乗せてエクササイズを行う。筋肉が緩む、背骨が整う、呼吸が深くなる、副交感神経が優位になるなどの効能があるという。作者はさらに脳を刺激し歌を生み出す効果を期待する。

作品二

小林 芳枝 東京

愛車を手放して自転車に乗ると言ふ八十代のゑがほ爽やか
 何かあつたら頼みますねと言ひながらドア閉めて入る隣もひとり
 嬰児たりし孫は高校生となり十七年目の忌日ちかづく
 十七回忌に参加したいと言ひくるる親族ありて身の温まる
 行き先を入力し最寄りのバス停を入れて定まる出発時刻
 六百歩余りの距離を通りまでバスの時刻に合はせて急ぐ
 ハンカチの木の幼木の若葉といふ青じそのやうな写真に見入る

益坂 順子 福岡

公園の広場を囲む提灯の開花を待てり染井吉野の
 いにしへの林道あとの草陰にふきのたう見ゆ登山の途中
 早咲きの桜を望む頂に風にともなひ小雪の舞へり
 溪谷と渡渉のつづく道すがら明るみてをり椿一輪
 整然と岩並びたるひとところしばし眺むる柱状節理
 源平の桜と虎尾桜咲き列をなしたる山の中腹
 頂に多くの人の集ひたり黄砂の覆ふ福智山の春

役員のなりて少なき公民館その存続を思ふ作今

石渡 静夫 ☆ 茨城

四か月指導を受けたる「武田節」今日は舞台へ袴姿で
 氣負わずに無心で踊ると腹を決め扇を構える舞台の中央
 稽古では一度もミスの無いところ舞台は魔物一瞬止まる
 靴下を履かずに素足で家の中ころうきうき花まつりの日
 移転して空き家のままの幼稚園のプールの脇の桜満開
 満開の枝垂桜を期待して山門くぐれば櫛の新緑（般若院）
 柿の葉は日ごと大きく緑増す嵐のあとの晴れわたる空に
 いつもなら氣にも止めない前の田は耕されずに草の絨毯

須藤 紀子 埼玉

中学生になる前にやってみたかったと少年は金髪ツーブロックになる
 縦横無尽に桜花びら吹き散らし何故となく風は荒ぶる
 足弱く座り込みたる老犬に名残の桜やはらかに降る
 雨の中西に東に用を足し暮れ泥む部屋に短歌誌開く
 目を継ぎて雨降る彼岸末となり供物の米も水漬きてありぬ
 少し甘きミルクコーヒーに身の内を宥められをり花曇る午後

鈴木 計子 東京

新しき雪踏みたくて踏む跡が広場につづくアトランダムに
 雪残る土手に蓄める露のたう待ちて踏みにき子どもの頃は

四月号 十首選

冬雷集 益坂 順子

必要性高きもののみ調へて物は増やさ
 ず身を奢るなく 赤羽佳年
 久々にわが家へ行くのか旅に似る施設
 のくらしも長くなりつつ 富田眞紀恵
 空爆に怯えて疎む子を庇ふ母の姿を
 「見詰めよ」為政者 山口 嵩
 あたたかき日差しあまねく公園に昨日
 も今日もながく居りたり 天野克彦
 令和六年四月の車検を受ける前処分と
 決める赤のプリウス 嶋田正之
 家までの道はあなたに任せます日溜ま
 りもとめて歩くあなたに 江波戸愛子
 古本の歌集を買ひてひらきたるページ
 にひとすぢ黒髪もあり 橘 美千代
 刻刻と閉じ込められてゆく友の恐怖も
 孤独もやわらげられず
 ブレイクあざさ ☆
 野に寝ねて流星群を見てみたしこの世
 に残る未練のひとつ 古嶋せい子
 自らの家に帰ってほのぼのと真昼のや
 さしき日のなかにある 姉川素枝子

四月号 十首選

四月集／残響集 山口 嵩

目が合えば小言の絶えぬ妻なれど不在
 のときはちよっぴり寂し 石渡静夫 ☆
 殺されし子らの映像絶え間なくネット
 に流れ来ガザの虐殺 須藤紀子
 節分を過ぎて日差しが少しづつ春に向
 かうを感じる日だまり 川俣美治子 ☆
 大部屋に移って響く大いびきに心配事
 を一時忘れる 豊田伸一 ☆
 棒鱈の煮付け旨しと褒められて口元滑
 る秘伝の味付け 佐藤幸子
 寒の水まだまだ含む黒豆かバケツの中
 に盛り上がり来る 藤田夏見 ☆
 節分の鬼らはこよひ弦月の光を浴びて
 飲み明かすらむ 小林貞子
 普段着を得意げに着るわが居て野の
 斜面にはふきのたう出づ 松崎みき子
 ねむれずに不安増す夢うつうつと気力
 落ちこみ春はいずこに 笠岡文字 ☆
 道端の三日目の雪に踏み込んでまるめ
 てみたり子供のように 金子八重子 ☆

摘むことがただ楽しかりし路のたう苦く食はずき子どもの頃は
園児らの帽子フェンスに並びみて下ゆく電車に手を振りてをり
幼らの待てるど知りて顔出して手を振りくるる車掌をりたり
みすずかる信濃生まれの孫の名のみすずかをけふは買ひ来ぬ
母に添ひ座席に眠る幼の持つ縫ひぐるみの耳下向きてをり
跳びながら来たる鳥が向きを変へ二足歩行に尾を振りてゆく
先頭に桃太郎の描かるる車両に貨物ひかれてゆけり

佐藤靖子 東京

歌集の名「水の月」の意わかるときテレビに見ゆる香港アクアルナ号
時代物読みつぐうちにいまだ見ぬ水の道なる小名木川親し
折り方をたがひできたる屑箱は三角型なり解きたしかむ
雄のブルー雌の緑の羽の色あはせもつ蜜鳥現れたると
眼光の鋭くなりて入り来たる執刀医の緊張それに安堵す
なんだかだメスの入りたる体にはひとには見えぬ後退のあり
韓国の青春ドラマのヒーローを日毎の時間待ちて見てゐる
陸軍の気象部ありし処なる気象神社に頼む無事着陸

東ミチ 青森

今回も大阪場所の前席に黒田清輝画「湖畔」に似る人の居り
庭用の水道水が出ず便利屋を呼ぶ豈図らんやため息の出る
取替へたる水道管一式の値の張れど扱ひやすく水の出も良し

植ゑ替へたるギガンジュームの芽が揃ふ大きく咲けよと春の肥料置く
夫の祥月命日に子と墓参り四月の日差しうららかにして
鉦たたき吾は経を唱へをり子は線香に火を点けて黙もくと供ふ
墓参り今年の役目の一つ終へ供物の苺を食みながら心を語る

山本述子 神奈川

夕暮れの桜木みれば彼の声「もう落着いてゐるからね」とも
快晴の花のトンネル長長と往復しをり花に酔ひつつ
花吹雪浴びてトンネル潜りをり友との会話しばし閉ざして
山桜森にぼつぼつ咲き初めて池に蛙の掛け合ひ聞ゆ
公園のいたるところに二輪草ありて一輪先に咲きをり
風強くペランダにくる花吹雪しばし浴びをり瞬きしつつ

内垣米子 千葉

暖冬といはれて四月朔日の桜並木の開花いまだし
寒暖の落差はげしきこの日ごろ服装まよひ桜いぎよふ
百選の桜並木の一駅を歩き来て万歩計の歩数出鱈目
兄逝ける長野の四月残雪を吹きくる風をつめたかりにき
壁に血の付くをためらふ一瞬にのがれゆきたり幸運な蚊は
午後の日の早くも翳り谷戸に建つ戸建ての家並みけふはさびしく
背に重きリュック負ひつつ思ひ出す子守りせし甥はやも還暦
鳩鳥鴨目白四十雀鶺鴒などゐて雀がかはゆい

四月号 十首選

作品一 石渡 静夫

凍る夜に雪道照らす満月は地上の闇を
溶かすごと輝る 田端五百子
体調を少し崩して籠もりいる収穫予定
の白菜思いつつ 正田フミエ☆
一つずつ同じ動作に豆食べる六十年を
共に生き来て 高橋楊子☆
大公孫樹は境内の狭い庭に立ち何の糧
にて年々伸びるか 樗木紀子☆
久々に友訪ねれば玄関に月下美人が三
鉢も並ぶ 林 美智子☆
明日など所在か判らぬか判らぬど又明
日ねと友に声掛く 本郷歌子☆
文豪に親しまれたる山の上ホテル旅館
の報に食事を予約す 伊澤直子☆
六千人に一人の難病とふ八代亜紀何と
不運な演歌の女王 乾 義江☆
うぐひすがどこかで一声鳴いてをり桜
見上げる吾に答へて 吉村昌子
買出しの屋に寄りたる回転鮎孫ら遠慮
しつつも皿高く積む 井上楨子

四月号 十首選

作品二 大塚 亮子

日記帳綴る意欲は三年が頃合ひと思ひ
購ふ師走 梶尾栄子
行き場なく避難する人らに容赦なく断
水停電寒さが迫る 本間志津子
断捨離に残し置きたる和筆筒の中身は
茶の湯にいそしみしもの 東 ミチ
近隣にはしやぐ子供の声響くこの冬初
の雪舞ふ朝 益坂順子
四年振り芝公園の更科に集ふそば好き
メンバー欠けず 大野 茜
海面より低きこの地に今日もまた驚く
高値のペンシルハウス建つ 松本英夫
やはらかな色合ひのコート身にまとい
立春近き日お稽古に行く 松居光子
父の字の張紙みつけ安堵せりバッグの
板チョコ夫と分け合ひき 三好規子
ばあちゃん元気だね十五の男孫に言は
るは何故か淋しき労はられてる
野口秀子
木造の小さな学舎米糠で磨かれ廊下は
つややかなりき 西村邦子

早乙女 イ 子☆ 栃木

母さんよ雨降ってるが出かけよう宇都宮に行く長女見舞いに
あちこちに桜咲いてる山道を車窓に見つつ長女の家まで

土かけをしなかつた独活の青葉のび新芽出るように切り取りをする
下の方が食べられそうな独活の茎新芽出るよう願いつつ切る

卯 嶋 貴 子☆ 東京

この音はいつでも恐い歯の治療キーンと削る機械の音が
さわやかな春の風が吹いている満開の桜の並木の道に

満開の桜の花は翌日の暴風雨に耐えて花弁落さず

裸木の公孫樹にポツポツ芽が出でて見れば日にち緑増しゆく

植 松 千恵子 静岡

以前には鳥インフルエンザなどなくて小屋に数多の鶏飼ひたり
豚や鳥殺処分する飼ひ主の無念の思ひ何万の命

無人機にて他国を爆撃して壊すゲームではなし戦ひ止まず

老い二人孫達居ぬ日極上の肉購ひて焼き肉にする

早咲きの桜一樹が満開になりて佇み春を見上げる

野 口 秀 子 山形

なごり雪乱るる心を諭すよう庭木に触れてつゆと消えゆく

雪の止む夜空に三日月おぼろにて今沈みゆくSLIMを乗せて

春雨の後に歩める道の辺に白梅咲き満ち香り漂ふ

四月号 十首選

作品三 天野 克彦

徒歩三分食用油の小瓶買ひ博多港を少
し歩いて戻る 小田原禮子

見上ぐれば暫くぶりのヘルクレス満月
までも山頂近くに 谷田律子☆

雪の間に芽吹く露の臺二つ採り夕餉は
炊きたてご飯に路味噌 奥山清子

山形は夫と出会いし街なりて病院の窓
に雪の蔵王山 井上鈴子

「冬雷」の赤彦文学賞の喜びに遠き信
濃の歌が浮かびぬ 山崎 猛☆

利根川の水面の波のきらきらと朝日を
浴びて光やわらか 塚本節子☆

暗き朝猫が布団に入り来るわが身ずら
して体撫でやる 羽田幸輝

底冷えにぬくもり求め夕食にだんご汁
作る今日は大寒 首藤文江☆

少しずつ日の伸びて温とき病院の待合
室に冬雷を読む 後藤恭介☆

老眼鏡かけて昔の楽譜出すブルグミュ
ラーは今も新鮮 片桐美穂子☆

歌集 / 歌書
御礼
編集室・佐藤靖子

■源 陽子歌集

『百花蜜のかげりに』

令和五年十一月二十二日発行の第五歌集
で五五〇首を収めている。「未来」「鯉と水
仙」所屬、講師・選者等多忙。歌集か
らの著者の印象を言うに丁度良い歌が
あった。それは、

植物の知性のすがたの完成と 蘭 オキキョウ
を言いつメールリンク

というのだが、蘭の格別の個が著者を
思わせる。自分の言葉、表現の工夫、
歌種の面白さが味わえる。

題名の「百花蜜のかげりに」は、一
様でない味わいが集まって生み出され
るものが、自分でありたい願望のよう
な気がする。

周辺の歌。

木を挽けばこがねの木の粉 暮れ
のこる空ゆるやかに時の船ゆく
てのひらに天の気、地の気うけて
立つ庭の直下は中央構造線
にんげんは関節動物 クサキリの

一人暮らし始まる孫がキッチンに立ちみる笑顔の写メール届く
朽ち果てる地に今も遺る寄宿舎は糸を繰る音にまぼろしを見す
綻べる桜の古木を仰ぎ見て叔父上たちの苦労を聴かむ
亡き父の命日近く紅と白の撫子購ひ寄せ植ゑをする

母の脈拍

永 野 雅 子☆ 東京

脈拍数が異常に高いと指摘され毎朝母の血圧測る

百三十近くの脈拍三週間続き町で病院に行きぬ

町医者は専門医への受診勧め紹介状を持たされ帰宅す

母連れて向かう病院は二年前迄父と通いし大学病院

脈拍は更なる検査必要と二十四時間心電図の予約す

自力歩行の出来る母の付き添いは車椅子の父とは違う

松 居 光 子 三重

カーテンを開くればうつすら草の上に雪積もりおり春の彼岸に

お水取りも彼岸も過ぎたるこの朝冬あしたのコートを着て外出す

春の嵐去りて鎮もる林より鶯の声さやに響けり

寒の戻りに遅れてゐたる桜だよりやうやく聴けり見頃満開

座らむとしたるホームの椅子の上に忘れられたる黒の財布あり

厚みある財布の中のポケットに学生証の挟まれてをり

「学生さんですね連絡とれます」とふ駅長さんの言葉に安堵す

持ち主に財布の還ること確信し名古屋行き急行に乗りぬ

山歩くいつもの道に気がつけば木々葉をつけて緑となりぬ
 ポタポタと耳にも目にも雨降りて気持塞ぎてやる気の失せる
 水仙の黄の花白の花咲きて春だよ春と告げて揺れおり
 ああ桜満開の見事なりハラハラと散る様潔し
 雨に濡れ紅白の椿小刻みに揺れて落ちたり花冷えの朝
 友の爪ネイルサロンで美しく変身したるを我が爪と比ぶ
 春キャベツ形も色も美味しそうただ切るだけで夕餉の一品

佐藤 幸子 山形

雨混じりの春の雪降る田んぼ道尋ぬる家なくワイパー忙し
 雪解土手の水吸ひて柔らかき土に群生見せる酸葉の朱芽
 被災地ののちを報じて十三年キャスターの口元に深きほうれい線
 金塗れの政治屋となれる議員らの弁明に呆れチャンネル変へる
 剪定に切られ散らばる林檎の枝はきのふ雀を遊ばせた枝
 録画するつもりで点けた「名探偵ポワロ」に引き込まれ五分最後まで見る

夏号のカタログ届く四月朔日わつめきのこの夏一推しとふ綿の上掛け

青き海、青き空

松本 英夫 東京

湯河原へ一泊二日の小旅行チェックリストに硬貨とマスクも
 寒空の幕山公園うめ開き石楠花の蕾小さく赤し

根府川の海は青く輝けり雲の下なる真鶴白し

根府川沖まぐるの寿司の雲ならび相模の幸とシャッター押せり

流れゐる琴の音滝にかき消され白き梅花は今さかりなり

空かすみ満開の桜の雲と飛び鎌倉目指し横須賀線走る

久能山家康の遺訓見たやうな七年経ちて再び来れば

那須岳の空の青きを遠く見て逃げ水追ひつつ青森指しき

夏盛る佐渡の浜辺ににぎりめし食まむとすれば鳶の弧を舞ふ

伊香保旅行

加藤 富子☆ 栃木

明日から旅行という夜に姪からの五歳の子が発熱というLINEあり
 出発日解熱したとのLINEあり参加するという姪とおさな子

一抹の不安を抱え伊香保にて現地集合す大澤屋うどん店

名物のうどんを食みて満足す五歳のおさなは食欲良好

町に住むおさな等元気に駆け巡るグリーン牧場は花曇り

中学生になりて参加の悠君はおさな子達の子守りが上手

おさな等が眠りたる後ひと部屋に大人五人の宴たのしみ

小嶋 知葉☆ 茨城

古刹なる般若院のしだれ桜今年も咲けり樹令五百年
 茨城のニュースに映るしだれ桜古さを讃え樹形を讃える
 わが家の菩提寺なれば香を焚き花入れ替えて桜ながむる
 ピンク咲き白咲くあとに紅色が椿の開花に順番ありぬ
 梅と栗柿も芽吹きてやわらかな黄緑色の樹形広がる

脚の曲がるを見て膝を痛がる

舞踊の師であった母は、老い方もさすが。

かつて慰問に舞いたるホームに母は生く(宝雅)の芸の名も住まわ

せて

生家から婚家へそして施設へと母の移動はそれつきりなり

離島に国として名をつけられたが、愛称には親しみやすい。

漁師たちの愛称ならんへソイシにトド岩、茶釜すべて島の名神々が置きし雫の島陰のたれのものにもあらぬ白き浜なつかしく優しい。

天花粉ひとつくしゃみに吹き散らし七月白き雨が降りくる

星形のなかに五つの部屋を持つ

オクラを切れば部屋ごと種子

(公益財団法人 角川文化振興財団刊)

■腰山佑子歌集

『メープルの落葉』

令和五年十二月八日発行、四六七首を収めた第一歌集。最初の一首目から、

著者はどのような人生を送っていくのかが気に掛かり、一気に読んでしまった。その一首目は、
 出会いより一年にして嫁ぎたり姑
 と夫の暮らしの中に

というのだが、結句から何か懸念が起きたからである。歌集全体でみると、良いこと悪いことの波の中に、著者を中心としてとりまく事柄が、歌で綴る物語になっていて分かりやすく、訴える力の強い一冊になった。

新婚の頃。

嫁ぎ来て勤め続けるわれなるに寝るまで姑と掘炬燵かこむ

三反歩稲作をする家族にて子育てさなか休日はなし

病む。

抗体が溶血おこす難病に苦しみしはてに光みえくる

命得てもどる日常今日からは勤めに田仕事子育てをせむ

夫の転勤にて得る自由。筑波山望む地。

厳しかりし姑と離れて転勤の地子らとゆとりの図書館へ行く

細長きダリアの球根三十個夏の華やぎ浮かべ植えこむ
なつかしきグラジオラスを思いつつ球根十個求めてきたり

藤田 英 輔 ☆ 高知

「ごはさんでねがいましては」掛け声の響き始まる算盤教室
カンザンは今盛りなり瓢箪は葉の出でており二本並びて
蒲公英の綿毛は風を受けて飛ぶサクサクと積み吾の窪地に
東雲にオブジェのごときタンポポはそこかしこ居て風と陽を乞う
ざるで水を掬うがごとし果てし無く流れて隠る言葉も歌も

吉岡 松 世 愛知

朝五時の新聞歌壇を待ちてをり西の空には有明の月
きらきらと春を知らせるやうに咲くミモザの花に光あふれて
子供らと「ドラゴンボール」観し日々よ目を輝かせ心躍らせき
風のなか歩道橋をば渡りつつ何かを探す鳥の心地せり
顔面の帯状疱疹どうなるか眼も充血し夫は疲れて

「ひとつつきの放射線」の始まりに間に合ふだらうか春をよぶ風

江藤 ひさ子 大分

天空を真二つに分けて東方に飛行機雲の伸びゆくスピード
桜花小雪舞ふがに散る朝の大分河畔をゆつくり歩く
ほの積もる小雪のごとき桜花散り散る川土手行き交ふ人ら
真向法体操終へてお茶タイム御八つおしやべりお口の体操

時来ればその当然生け垣を庭を彩る椿の幾種類

又もとて草にかがみつもう一首探しに出でつ朝の庭に
朝露を置きて綻ぶぼうたんの淡き桃色吾を呼ぶ庭

安川 敏 子 ☆ 埼玉

暑い日と冬に戻る日交互にて桜はやつと三分咲きほど
スタッフと皆んなの手作業500の桜壁一面に満開になる
九時八分又も地震がドンと来るガラスの花瓶を抱きよせ支える
目標は安定歩行ノルディックウォーキングポール両手に散歩す
車窓の桜並木は華やかで下車したいなとふと誘われる
知人より五月のコンサートの知らせ来て即電話にてチケット依頼す

齋 鹿 ミヤコ 神奈川

レモンの実その色少しオレンジに近づきにけり今日から四月
鉢植糸の黄のパンジーがはこべらと菊の新芽に囲まれてをり
少しづつ筋肉痛のをさまりて今朝は新聞とりに行きたり
寝返りをすること出来ず目覚めまでベッドの上の姿勢変はらず
レンタルのベッドにすれば何と楽リクライニングの四つのボタン
一人住む隣の人が朝はやくわれを起こしぬ緊急と言ひ
被害受けたる隣の人の銀行カードの中止手続きそばに見てをり
銀行カードすでに引き出しされたと言ふ担当者の声を聞きたり
隣の人のカード詐欺被害の顛末を知りて不穩の一日過ぎたり

(☆印は新仮名遣い希望者です)

大海に出し魚かも身は自由古典文
学喜々と受講す

土浦に終の住処を立てる。再び姑と
同居。

マイ・カーを置いて勤めに出でゆ

きぬ何年ぶりぞ共稼ぎ主婦

若き日に覚えし経理四十路にて特
技を生かす職に恵まる

以前とは別の病気になる。

「血小板減少性紫斑病」と告げら

れて五年経し今日新たなる病

気がつけば呼びかけられる家族の

顔生かされ生きる命の実感

自由の時間のある時は何度となく旅

を重ね家族の思い出を共有し、夫婦は

今の平穩の続くを願っている。

(星雲叢書第82篇 ながらみ書房刊)

■外塚喬エッセイ集

『うたの徒行』

師、木俣修の「形成」を引きついで
十年、のち平成六年に「朔日」創刊。
本書はその朔日に載せたエッセイの二
度目のエッセイ集である。選んだ文は
一二六篇。その中からここでは「数字

の三」というタイトルを選んでみた。

人間の記憶力には、限界がある。
物ごとを三つまでは覚えるが、四つ
になると一つはすぐには思い出せ
ないらしい。人それぞれによつて
記憶力には差があるだろうが、三
という数値は切りのよい数字には
違いない。

三という数値は、多くの場合に
使われている。何の理由があるの
か判断は付かないが、他の数値に
比べて、格別に多いと言つてもよ
いだろう。例えば、日本三景がある。
松島、天橋立、厳島神社とすぐに
答えを出すことができる。実際に
は日本四景などはないが、日本四
景なるものがあつたとしたら、そ
のうちの一つを答えるのに戸惑う
らしい。三という数値はさまざま
な場面で使われている。「一段落略」
その昔、「隠し砦の三悪人」なる
映画があつた。「略」あらずじなど
は今ではすっかり忘れてしまつた
が、この「三悪人」という言葉は
強く印象に残つていた。

作品三

小田原 禮子 福岡

寒戻り五輪目遅し標本木花より人と出店の多く
かの家のしだれ桜も満開か見計ひ行く買物帰り
日没後堀沿ひ走るバスの窓本丸不意にライトアップす
不出品三度重ねる篆刻展スイッチ入れて小品を出す
施設より姉入院の知らせ受く酸素マスクと尿管管着く
副反応きつき薬か口に入れプツと吹き出す認知症の姉
弟は自身大事と我に言ふ姉認知症自身とは誰

尊徳像

新井光雄 ☆ 東京

ふるさとの清滝小の閉校式 校歌も変わり老いは唄えず
庭に立つ尊徳像は変わらぬも七十年後講堂はなし
在校生二千余人が十四人閉校でなく廃校と言え
校庭に立てばマウンドこの辺り亡き友想い投球ポーズを
五棟ありし木造校舎もビルとなり敢えて入らず観る気のわかず
六年の校舎は確かこの辺りアルキメデスの原理習った
廃校を飾るは打ち上げ花火なり銃殺のごと鳴って鎮まる
男体山眼の前にする校門に両手をかけて心で去らばと

遺された尊徳像よ今日よりは淋しきままにも朽ちるまで立て

松崎 みき子 岩手

桜咲く海沿ひの町走り行く移動スーパーは花びら乗せて
無人駅にツバメ飛び交ふ麗らかさ線路の先はどこまでも海
色あせた畳は更に日焼けて父母の居ない歳月計る
高騰するガソリンに夫嘆きをり車頼りの生活厳し

津田 美知子 岩手

朝食後いつもの緑茶をゆず茶にす「ああ美味しいこと」と義母上機嫌
母の手を握れず仕舞ひの面会に笑顔見たるを良しとする吾
井戸水を使ふ我が家の珈琲は格別美味いと言ふ人の有り
一瞬に彼の惨状の甦る地震アラームの鳴り響く朝
「鬼は外」と部屋ごと豆撒かずして置いて廻るが我が家の節分
いち早く二輪咲きたる水仙を娘の仏前にたむけ春を告ぐ
外は雪なれど桜餅並びみて北国の春は菓子舗より来る

谷田 律子 ☆ 栃木

枯草をむしり取りたる土の上に鳥達が来て虫をついばむ
花水木のかたい蕾に桜ふぶき初夏の息吹を待つかのごとく
親ゆびと薬ゆびとで煮大豆つぶす二月恒例のみそ作り
母の墓数年ぶりに訪ねたりこれが最後と香を供える
北風吹く畑に仏の座ひろがりて草むしりする春の近づく
なつかしき友と握手する同窓会八方園の庭に小雨降る

歌においても数値が使われることが多い。三とは限らないが、数値にこだわっている一人に玉城徹がいる。(以下四首のうち二首省略)

ぱれつとに色置くごとくさむき夜
にしるしとどむる言葉三つ、四つ

『徒行』

三つ二つ飛びて鴉はみるみるとひ
かりになりぬ春立つらしも

『枇杷の花』

玉城徹は安直に数値を使っていない。一首の中で数値をどのようにしたら生きるかを、考えている。

—略—

集中の「木俣修生誕一〇〇年記念の会」の記録からは、吉野昌夫氏、小島ゆかり氏がそれぞれ二首ずつ木俣修の歌を挙げています。一首ずつにして紹介したい。吉野氏、小島氏の順。

カロリーの図表開してゐる汝が前
ああ鶏のひと塊青菜のひと束

『雪前雪後』

迫力のなくなれる声などといふな
かれひとつふたつ齒の欠けたるゆゑぞ

『昏々明々』

(朔日叢書第122篇 六花書林刊)

■川田由布子歌集

『水の月』

令和五年十二月十九日発行の第四歌集、四四六首を収めている。「短歌人」の発行を受けつぎ、二〇二〇年病気を機に辞し同人に戻った。著者は小名木川を見おろすマンションに住み、鳥たちの通う様を見、お相撲さんに会い、川に映る月を「水の月」と親しんで暮らす。その伝でいえば、私は小名木川を「水の道」と言いたい。時代物ばかり読んで、小名木川を見たことはないのにすごく親しんでいるのであるから著者の環境に親しみを感じる。

小名木川照る日曇る日おだやかに
屋の鷗を遊ばせている

小型漁船につかず離れず飛ぶかも
め初列風切ためらいあらぬ

水の月欠けつつ炎立ちゆくを見せ
て皆既月食の川

海猫の町とよばるる日もあらん向
かいのビルが塙と聞けば

信号をわれのとなり待つつ力士帯
に下げたる根付がしぶい

三・二一被災の荒浜小訪ひぬあの刻のままの時計かけあり
跡形もなき荒浜に立ち慰霊碑に涙流して経あげたりき
亡き夫の十三回忌はやも来ぬ法要の日を決め皆にしらせる
きらきらと粉雪降りしく明け方に夫の息絶えしが今に顕ちくる
夫と共に求め来たりし良寛の六字名号かけて拝みをり
テキサス州に今住む男孫も来るは嬉し加州に住める次男と共に
秋まきの豌豆あをあを手を伸ばし白蝶来るをわれは追ひある

朝日受け残雪煌めく頭殿山「白鷹富士」とわれ呼び居りぬ
植ゑ呉れし彼の人逝きて十年経ぬ黄蓮花咲き春告げ呉るる
彼岸入りあづき煮る音ことごとと落し蓋の下に煮汁が躍る
春彼岸中日は孫の立ち日にて墓前に立てば涙新たに
「源氏物語読む会」ありき偲びつつ「光る君へ」を楽しみて観る
「源氏物語」二周完読の感激を分かちし友ら大方故人
県書道展出品案内届きたりまた新たな挑戦はじむ
民謡の昔ならひし「米節」を米寿のわれを祝ひて揮毫す

空豆の形に似たる腎臓を夫の学ぶそらまめ教室
可愛らしきそらまめ色の冊子にてわれも習ひぬ減塩のこと
漬物を好める夫の減塩に作付けやめる薄皮丸茄子

入学の祝ひのバッグを子と買ひに出向く十日町御殿堰そば
背が痛み夜中に幾度か熱湯に入りし兄と聞けば涙す
畑隅に粃の袋が置いてあり兄に代はりて植ゑくるらし
兄作りしぶらんこの下の日溜りに福寿草咲くとLINEが届く
食品を購入の都度塩分を確かめてゐる紅麴をも

雛の日にクッキー作る子や孫にハート多めに型抜きをして
幾年も少女漫画を娘と待ちき二十七巻『ガラスの仮面』を
キャンパスで会えずに愛子さま卒業し心残りも孫は言いおり
オキザリス抜きてピオラを一行に植えて玄関への歩み爽やか
早咲きのフリージアを供えつつ男孫に会うのとそつと伝える
ママ鬼に大泣きしたる男の孫も四月は幼稚園生となる
水泳とサッカーと野球の重なる夜スポーツ賭博の報道を見る

猫たちが並びて外を眺むる朝何見てゐるや穏やかな目で
ベンガルの猫ら家中駆け回る上へ下へと野性のままに
南天を啄む鴨を猫たちが身を伏せ見入る雪の朝
鴨は南天の次敷柑子赤き実求め茂みに潜れり
鴨は敷柑子の赤食べ尽くし主役無くした緑葉残る
芽吹きたるハウスの臯月生き生きと広げる若葉に気持ち弾みぬ
たわわなる馬酔木の花穂は幾重にも弥生の雪にいよいよ重し

そつと掌をおくように降る海雪の
太平洋になるまでを見つ

文筆の人らしい歌。

必要とされるとき待つ消しゴムの
楽天を日々愛しやまざり

伊東屋にコクヨのキャンパスノ
ト買い丸善に行き小銭入れ買
出会った人の心に残る言葉。

「信仰は豆腐のようになること
す」法会の際に住職宣う
母のこと。

丁寧な言葉遣いをくずすなく逝き
たりしこと畏れつつ思う

(六花書林刊)

■蒲ヶ原朱実歌集

『未知なるもの』

令和五年十二月二十五日発行、
五二八首を収めている。長女誕生（平
成元年）の翌年より短歌を始めその
ち次女三女に恵まれ、子達へのこまや
かな心情あふれる歌が多く生まれた。
平成三十年間の先ずはそういう歌を
あけてみたい。

持てる自我すべて振りあげ対ひく

るわが幼子をまるごと愛す
何気なく吸ひたる息は胎児まで届
くかと再び深く吸ひ込む
師走の日々急かされる吾の頭の
中に子の爪伸びつづけをり
遠足に付き添ふ今日は奈津だけの
母になりきり手を繋ぎゆく
著者の見える歌。

早朝のスケート教室頼りなき指導
者となる日々の始まる
重き腹押さへ思はず小走りに誰か
落ともし千円札を追ふ
われの影灯の下に物を言はざれど
われより強き意志もつごとし
職場より帰る夕べの風の中作り笑
ひが吹かれて消ゆる
家族など。

女四人集ふところに夫帰り明るき
波長かすか変へゆく
草を引くわが耳掠め飛ぶ蜂の翅音
「ラ」の音震はせてゆく
おもしろい歌の中から一つ。

パソコンのキーボードの隙間一匹
の蟻がひたすら四角く進む
(長流叢書第九二篇 ながらみ書房刊)

菜の花の黄色い地平の彼方には幼き頃の夕日沈みぬ
佐野からの同窓の友数多きて八芳園で半寿も祝う

半寿祝いの虎屋の羊羹喜ばれ幹事の我は少し嬉しき

この会を開いてくれて嬉しいと感謝の言葉にわれは感激

前回には出席したる友のいまガン末期にて自宅療養

同窓会これで終うとわれ言えば続けてほしいと言う友多し

塚 本 節 子☆ 茨城

母の柩を抱きて父の慟哭す「六十五年間ありがとう」と

父母は「いとこどうし」と言いながら争い多き日日にてありき

晩年は争い少なき日日なりき父母共に笑顔に暮らせり

樹齢五百年般若院の枝垂れ桜ライトアップの灯りに揺れる

咲き継ぎたる戦国室町時代より枝垂れぎくらの淡きくれない

沈丁花はおきな児の掌をひらくごとそつと咲きおり香りながらに

ポイントの十倍セールに釣られ買う春蒔き花や野菜のたねを

「美味しいけどお腹一杯だから残すね」と三歳の女孫のかわい言葉

笠 岡 文 子☆ 広島

春風に道行く人を黄にそめて見守るときミモザ花房

沈丁花のおしゃべり終りひっそりと若葉いきおいつンツン伸びる

土手に来て桜花びらあびながら西行法師の詠みし月をながめる

ぼんぼりに名前をみつけ懐かしく過ぎにし年月ゆく春おしむ

二〇一七年刊の『いとしい一日』に
次ぐ八冊目の歌集、三三五首を収め
る。この間試行錯誤の連続であったと
言う。その背景には前歌集以後に阿木
津英氏の「八雁」に入会されたことも
あろう。

年とれば他力を頼むほかはなく本読
むときは眼鏡のちから

定年の最後の授業は右肩の痛みを休
へ白墨を持つ

一九六三年生まれとあるので五十代
半ばの作と思うが、歌われるように
持つて生まれた肉体に様々な都合が
生ずる頃かと思う。関連的に言えば老
眼とか四十肩とかだが、それらを抱え
つつ生活する姿が見える。

青空がこんなに近いタンポポの綿毛
がとんでゆくウクライナ

蒲公英の黄花と青空のイメージは戦
場と化しているウクライナの国旗を思
わせる。

プロ野球の開幕戦を楽しみて応援合戦に感情たかぶる

書かないと全部忘れてしまいそう今日の買物明日の行動

副作用薬を飲めばあらわれて肌の乾燥かゆみともなう

金 子 八重子☆ 千葉

ブギウギの衣装のデザイン見覚えの有りて懐かし昭和の半ば

大切な便りか投函した後にポストの頭を少女は撫で居り

交流を求めて麻雀に行きたれど終わればさつさと帰りて来たり

ハイボールすんなり断ちて二年過ぎ減酒の効果か朝は快調

アポカドのツヤと弾力確かめてヘタの隙間に食べ頃見極む

予想外の寒の戻りに開花ずれ予報はずして予報士詫びいる

白髪増え孫の指摘に答えたりグレイヘアに挑戦中と

後 藤 恭 介☆ 茨城

ぬくぬくと布団の中に籠もりいて戦火・地震の被災者思う

今年また咲き揃いたる黄水仙「春が来たよ」と下向き揺れる

雛人形を飾る学習センターは親子の組とシニアにあふる

筑波園の坂道多き梅林の展望茶屋に梅茶味わう

「光る君へ」のドラマ見ながら『源氏』を読まねばならぬと思いはじめる

春の宵マンガ『源氏』に平安の貴族たちの愛の作法を偲ぶ

妻を祝う牛久シャトーの誕生会「完治」を願うワインを酌めり

首 藤 文 江☆ 埼玉

婚礼の今日の良き日を祝いつつ朝日に雪舞う札幌の街

建こそ師つばめのやうにしなやかに
天翔けにけり建こそ詩なり
二十歳で前衛短歌に出会い春日井建
を師と仰いできた。歌集名は春日井歌
集の『末青年』の「青」を意識して引
き継いできたものであるらしい。ウク
ライナの空の青も、ここでは建に繋が
る「青」なのかと思う。

実生活に基盤を置きながら「あそび」
の部分に腐心した、ともある。

刺身にはさしみ醤油を生徒には計算
づくでない生き方を

風ふけば風になびかふ新青葉よろこ
びはいま声をともしなふ

大昔に筆者の体験した前衛短歌は難
解を第一としていた気がする。解らな
くて当然と豪語する人も居た。著者の
「あそび」はその名残りなのだろうが
読者に伝わることを前提にしている。
語の韻を踏むとか、リフレインのバリ
エーションを重ねるとかのテクニク
を感じる。本来なら筆者が賜ることの
ない歌集なのかと思うが、表現に腐心
したと言う著者は筆者にも解るだろう
と思われたのかもしれない。実生活の

本当に良かったねと思ひ溢れ涙がにじむ婚礼の日に
笹寿司の一枚ごとの笹の葉は海の幸をも優しく包む
春休み小江戸川越食べ歩く若者たちに一人混じりて
互いに咲きましたねと笑みこぼれ桜見上げる見知らぬ人と

片桐 美穂子 ☆ 神奈川

傘干せば昨日のしづくは大空へ静かに戻りよその地潤す
定年の上司に贈る花束に小さき蜜蜂隠したき我
韓国のドラマ作家の意地悪さ喜んでいる視聴者の群れ
性格のゆがみも日々の作品にこめれば不思議と個性に見えて
遺影取り埃払えば春の雪会いたき想いも積もり積もって
亡き母のためにと届く花かごは送り主らの心の色か
「冬雷」の門戸の広さと奥深き合同歌集の行間に満つ

岩村 知康 長崎

仰ぎたる普賢岳^{ふげん}なだりの山桜はや咲き出だし春となりけり
打ちなびく春さりに来たる木々の間にいちはやく咲く山桜花
川の面に湧く朝霧は麓より若葉の森を上りゆくなり
霧流れ晴れゆく山の椎わかば朝の光にあざやかに照る
川沿ひの並木の桜咲きさかりその影淡く水の面に映ゆ
桜咲く岸辺を行けば上流に堰堤越える水音聞こゆ
うらかな春の川辺に咲きさかる桜愛でつつそぞろ歩きす
上流ゆ流され落ちる魚^{いさな}狙ひ鷺はひたすら堰下に立つ

注目の新刊 !!

歌壇、昭和19年生まれの会の活動を
締め括る合同歌集ファイナル版。
小誌選者、小林芳枝氏参加。
新作30首+エッセイ
38名が名をつらねる。

巻末には詳細な活動記録が編まれて
いて、貴重なる資料である。
A5判 本文352ページ。

読み応えあり。
冬雷会員の皆様へ購読を薦めます。

今回、ご注文は送料共 3000円で
受け付けます。

冬雷短歌会事務局



昭和19年の会・合同歌集
モンキートレインに乗って ファイナル
ながらみ書房刊・3000円(税別)

道後温泉本館全館営業再開・改築一三〇周年記念

第42回子規顕彰全国短歌大会

応募方法 雑詠2首1組 1,500円
何組でも可。(未発表作品に限る)
規定の応募用紙は子規記念博物館のホームページから
ダウンロード(A4版)できます
必要事項を楷書で明記し、応募料を添えて応募ください。
郵送の場合は郵便小為替か現金書留。直接持参も可。
令和6年7月31日(水) 当日消印有効

締切 令和6年7月31日(水) 当日消印有効

選者 秋葉四郎 坂井修一 中川佐和子
吉川宏志 片上雅仁

賞と発表 文部科学大臣賞・愛媛県知事賞・松山市長賞・松山市教育長賞
後援賞 現代歌人協会子規記念賞・日本歌人クラブ賞
短歌研究社賞・角川『短歌』編集部賞・現代短歌社賞
選者賞 各選者 特選3首・秀逸5首・入選15首
※大会当日に発表 表彰

入賞歌集 応募者全員に1冊1冊送付します。(12月末予定)

表彰式 令和6年10月27日(日) 午前10時より
会場 松山市立子規記念博物館 4階講堂

記念講演 講師 坂井修一氏 (現代歌人協会副理事長)
演題 「子規と貫之―訣別、そしてこれから―」
〒790-0857 愛媛県松山市道後公園1-30
子規記念博物館内 子規顕彰全国短歌大会係
電話 089-931-5566
ホームページ <https://shiki-museum.com>

〈主催〉松山市教育委員会
〈後援〉文化庁 愛媛県 現代歌人協会 日本歌人クラブ 松山歌人会
短歌研究社 角川『短歌』 現代短歌社 朝日新聞社 読売新聞社
毎日新聞社 愛媛新聞社 N日K松山放送局 南海放送 テレビ愛媛
あいテレビ 愛媛朝日テレビ FM愛媛 愛媛C.A.V

作品募集

日常が歌われたり、家族も多く出てく
るし親しみやすいが、その中に微妙な
バランスを保ちつつ古語や故事やカタ
カナ語等も鏝められる。
プールにはききなみ立てりスイマーの
くちびるが「たたいま」と動いて
この歌に「池江璃花子選手」の詞書
が付くと実によく解ってしまおう仕組
み。このかたが多い。
醜聞の逆白波に真向かひてくちびる
を囁む山尾志桜里は
山脈を弟にたくへ恋ふる夜は軽くジョ
ギングでもしてみるか
知識も情報も盛りだくさん感がする。
印象に残った作品を幾つか挙げて、著
者への御礼としたい。
まつりごとに加藤の乱のありしこと
正気の沙汰はかくまで苦し
一分の間にみたざる朝だちもうれし
く思ふますらをなれば
ややこしきこの世にありて掃除機の
名前はジルバではなくルンバ
作品世界は広くて、楽しみながら読
める歌集であった。
〔四六判185ページ 定価一五〇〇円〕

斎藤茂吉記念館特別展

旅する斎藤茂吉

その瞳は何を映したか

2024
4.27^[土]
▶▶▶ 8.31^[土]

会場 斎藤茂吉記念館守谷夫妻記念室

開館時間 9:00~17:00(入館受付16:45)

入館料 大人 600円 / 大学生 300円

休館日 水曜日・7月第2週(7月7日~13日)

※団体10名様以上割引 ※障がい者等割引(団体料金)

特別展チラシ持参の小・中・高校生は入館料が無料となります。

茂吉講座「茂吉の足跡をたどる」

日時 令和6年6月16日(日) 午後1時30分~午後2時30分

運営協力 山形県歌人クラブ所属歌人

会場 斎藤茂吉記念館集會室(1階)、守谷夫妻記念室(地階)

定員 40人(先着順)

講師 斎藤茂吉記念館学芸員

参加費 当館入館料



公益財団法人

斎藤茂吉記念館

〒999-3101

山形県上山市北町字弁天1421

TEL023-672-7227

FAX023-672-2626

<https://www.mokichi.or.jp>

主催 / 斎藤茂吉記念館
共催 / 山形県・公益財団法人 山形県生涯学習文化財団





編集 後記

▽参加者百三名による七冊目の『作品年鑑・合同歌集』がこの夏完成する。編集長からのお知らせの通り今回が最終の刊行となる。それぞれの作者の自選作品と年間作品、短文、それに作品展望の記事も加わるので相当に分厚く立派なものになる。皆様のご協力に感謝し担当の仕事頑張りたい。

▽冬雷ホームページでは毎月最新号を掲載している。画面で文字の大きさも調節できるので活用して楽しんでほしい。「ネット歌会」も毎月続行。「歌会閲覧」をクリックしてぜひ覗いてみてください。

▽新緑が広がる季節、早くも熱中症予防の話題が報道されている。夏に向かって晴れた日には気温も高くなる。暑さ対策も必要になってくる。健康を保ちながら作歌しましょう。

（桜井美保子）

▽能登半島地震とそれにより東日本大震災を想起する歌が少なくとも六名の作者に八首詠まれた。震源より百キロ以上離れた新潟市でも液状化による甚大な被害があった。特番「テレメンタリー2024液状化に揺れるまち」能登半島地震 新潟で見えた教訓」は指摘する。六十年前の新潟地震の液状化部とほぼ一致し対策がなされていなかったと。柏崎市山本団地は2007年中越沖地震後、地域全体の液状化対策に住民も費用を負担し「地下水位低下工法」を施行して今回被害は無かったと。

（橋 美千代）

▽小誌創設者の木島茂夫先生が急逝された一九九九年末には、出詠者数三〇〇名に迫っていたが、現在は一三〇名ほどになっている。当時を振り返ると、編集時に扱う原稿の量がどきどきと箱にぎゅう詰り状態であった。もちろん今のようにデータでの投稿など皆無だったので単純に比較できないが、そ

れでも月々感じる原稿量の薄さには驚かされる。▽という状況なのに『作品年鑑・合同歌集』への参加者が一〇三名というのは驚異的な数字だと思う。会員の皆様のご協力に厚く感謝申し上げたい。

（大山敏夫）

▽今回が最終となる「二〇二二・作品年鑑・合同歌集」は規定の百名参加を満たして順調に作業が進んでいる。七年前にこの企画案を聞いた時は一年間の作品を全て一冊に纏めることなど夢みないな話だ、と思っただけで第一巻のあとがきには「平成三十年六月吉日」と記入されているので発案から五月足らずで四〇〇頁のデータが完成したことになる。参加者一八名の「自選二六首」が大活字、その他の作品全てが小型活字で掲載されている。編集室のデータの内製化に依るもので、資料を新しく作成する手間が省けたからとはいえず誌上で呼び掛けて参加してくれた方々に資料を送った

り、集まった原稿を纏めるまでの様々な作業を思うと大変な速さであった。あれから毎年改良を重ねて迎えた最終号はあと一息で完成する。ご参加下さった皆様に感謝したい。

▽「島木赤彦の一首鑑賞」が四回目になった。今月は乾義江さんが選んだ一首から作品の背景や赤彦の人柄などに触れて鑑賞されている。私も参加したが一首を選ぶ作業の中で新しく知ることが多くあり楽しかった。この機会に赤彦の歌を読んで心に留まる一首を探してみたい。（小林芳枝）

▽新入会
岩村知康
▽誤植訂正（五月号）
32ページ 本郷歌子氏8首目、美人薄命 ↓ 美人薄命
63ページ 江藤ひさ子氏1首目、二月二十二日二十二分 ↓ 二月二十二日二十二時二十二分
となりませす。「二十二時」が抜きましたことをお詫びします。

編集後記

《冬雷規定・掲載用》

- 一、本会は冬雷短歌会と称し昭和三十七年四月一日創立した。（代表は大山敏夫）
 - 一、事務局は「東京都葛飾区白鳥四の十五の九の四〇九 小林方」に置き、責任者小林芳枝とする。（事務局は副代表を兼務）
 - 一、短歌を通して会員相互の親睦を深め、短歌の道の向上をはかると共に地域社会の文化の発展に寄与する事を目的とする。
 - 一、会費を納入すれば誰でも会員になれる。
 - 一、長年選者等を務め著しい功績のある会員を名誉会員とする事がある。
 - 一、会員は本会主催の諸会合に参加出来る。
 - 一、月刊誌「冬雷」を発行する。会員は「冬雷」に作品および文章を投稿できる。ただし取捨は編集部一任とする。「冬雷」の発行所を「川越市藤間五四〇の二の二〇七 大山方」とする。
 - 一、編集委員若干名を選出して、合議によって「冬雷」の制作や会の運営に当る。
 - 一、会費は年額（購読料を含む）次の通りとし、六か月以上前納とする。ただし途中退会された場合の会費は返金しない。
- *会費は原則として振替にて納入する事。
- A 作品三欄所属会員 一四〇〇〇円
 - B 作品二欄所属会員 一七〇〇〇円
 - C 作品一欄所属会員 二〇〇〇〇円
 - D 維持会員（二部購入）二六〇〇〇円
 - E 購読会員 八〇〇〇円
- 一、この会則は、二〇二〇年一月一日より執行する。

《投稿規定》

- 一、歌稿は月一回未発表9首まで投稿できる。原稿用紙はB5判二百字詰めタテ型を使用し、何月号、所属作品欄を明記して各作品欄担当選者宛に直送する。原稿用紙が二枚以上になる時は右肩を綴じる。締切りは十五日、発表は翌々月号。担当選者は原則として左記。
- 冬雷集・作品三欄（メール投稿分）
- ・担当 大山 敏夫
 - ・担当 桜井美保子
- 作品二欄・作品三欄（手書き投稿分）
- ・担当 小林 芳枝
- 一、表記は自由とするが、新仮名希望者は氏名の下に☆印を記入する。
 - 一、無料で添削に依る。一通を返信用として必ず同じ歌稿を二通、及び返信先を表記した封筒に切手を貼り同封する。一週間以内に戻すことに努めている。添削は入会後五年程度を目処とする。
- 《Eメールでの投稿案内》
- 白地に一まずつべタ打ちにして、行間も空けないこと。頭を一字分空けたり、一首を二行に分断したり、余分な番号を付けたたり、色を付けたりしないこと。分量の少ない場合は通常のメール本文、又はケータイ・スマホでも送信可能。
- Eメールによる投稿は左記で対応する。
- 大山敏夫 tourai-ooyama@nifty.com
 - 小林芳枝 kysie@nifty.com
- 桜井美保子 mhoko496@sa4.dion.ne.jp

| | | | | | |
|--------|-------|--------------------|------------|---|---------------|
| 《選者住所》 | 大山 敏夫 | 350-1142 川越市藤間 | 540-2-207 | ☎ | 090-2565-2263 |
| | 小林 芳枝 | 125-0063 葛飾区白鳥 | 4-15-9-409 | ☎ | 03-3604-3655 |
| | 桜井美保子 | 235-0022 横浜市磯子区汐見台 | 2-2-2-608 | ☎ | 090-6029-0590 |

2024年6月1日発行

編集発行人 大山 敏夫
 データ制作 冬雷編集室
 印刷・製本 (株) ローヤル企画
 発行所 冬雷短歌会
 350-1142 川越市藤間 540-2-207
 電話 049-247-1789
 事務局 125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409
 振替 00140-8-92027
 ホームページ <http://www.tourai.jp>

頒 価 700 円